

その赤ん坊はメールに添付されていた。

最初にそれに気付いたのは、仕分け作業中のメールサーバーエージェント、エイトだった。

「何だこれ、ものすごい容量……」

パケット測定コンベアを流れてきたメールには、四辺が八十センチメートルくらいの箱型ファイルが添付されている。

「如何なさいましたか、マスター」

隣で作業をしていたMAILER<sup>レ</sup>DAEMON<sup>デ</sup>のアイベロスが彼の手元を覗き込んできた。

アイベロスは情報ネットワーク上に生息する電子の獣。デジタルモンスター、略してデジモンだ。その種族名をトウルイエモンという。

菫色のロップイヤラビットが、格闘家の如き道着を着込んでいるといったような風体の獣人型のデジモンだ。メールで悪事を働くウイルスを宿敵とする種族でもある。

「添付容量オーバーだよ。だけどこの荷物、大きさの割に今までにないくらい重いんだ」

「中身をスキャンいたしますか？」

エイトは紺色の局員服を着たあどけない容貌を歪めて箱を持ち上げ、アイベロスの前に突き出した。

「頼むよ」

「承知いたしました」

アイベロスが鼻をひくつかせて箱を嗅ぎ回る。

こうして荷物をスキャンしているのだ。デジモンらしいやり方である。

ひと通りスキャンを終えたアイベロスが困ったように口を開く。

「……マスター。これはどうやら生物のようです」

「生物だって？」

エイトは顔をしかめた。

この仕事に就いて初めての出来事だった。

エイトは電腦空間「リヴァース」ニホンサーバー・トーキョーストレージの生まれだ。

年は零歳十ヶ月。

S M T P サーバーシブヤブロックのメール転送エージェン<sup>A</sup>ト第八エリア担当。

それが彼の肩書だった。

彼が生まれる遙か昔、人類の99%は物質世界<sup>リアルワールド</sup>を放棄した。

暦<sup>こよみ</sup>が西暦で管理されていた頃、人類は自らの利用する電子ネットワークの裏、サイバースペースに別世界の存在を発見した。

人類が構築したありとあらゆる電子データから創造された世界。通称デジタルワールド。山河があり、気候があり、街すらある。そこに住まう知性持つ情報生命体こそ、デジタルモンスターであった。

獣<sup>モンスター</sup>の名が示す通り、彼らはデータを核として様々な生物の形で生まれ、デジコアと呼ばれる脳と心臓にあたる部位と、骨たるワイヤーフレーム、皮たるテクスチャを持つ。命ある生物として食事し、闘争し、成長し、コミュニティを築き、老いて死ぬ。更に特徴的なのは、彼らは人間の住まう空間であるリアルワールドに自らを物質化<sup>リアライズ</sup>できることだ。

当初、リアルとデジタルを行き来する彼等と人類は数多の衝突を繰り返した。双方に多くの犠牲を生み出した後、人類とデジモン達は共存の道を選んだ。

二つの生物の生活圏に境が無くなってくると、今度は人間同士のみ<sup>の</sup>紛争が絶えなくなった。デジモンの力を借りて繰り広げられる、資源を巡った争い。度重なる地表の汚染。疲れた人類は、地球を新たな姿に作り変えた。

惑星型巨大演算装置「リヴ・アース」。

——通称デジタルワールド・リヴアース。

地球の核のダイナモ効果をコントロールし、地磁気を人工大陸プレートに書き込む技術の開発。これによって惑星丸ごとを演算装置として創造された究極のサイバースペース。地球のコピー。

人類はこの広大なサイバースペースをデジタルワールドへ分譲する見返りに、デジモン達に物質を情報転写<sup>デジタルライズ</sup>する技術を請うた。デジタルワールドの管理を司るホストコンピュータたるイグドラシルは、デジモン達の生活圏の容量不足<sup>メモリ</sup>を一気に解決できるとしてこれを快く受け入れた。

結果、人類はデジブレインと呼ばれる電腦、ワイヤーフレームにテクスチャの素体だけとなつてリヴアースに逃げ込むことで、言語の壁、肉体の不自由から解放されたのだ。

そして情報生命体達のユートピアが出来上がった。……はずだった。

そんな人類にも逃れられぬものが三つだけあったのだ。

時間と死、そして退屈である。

サイバースペースにて光の速さで交わされる情報通信速度に、いつしか人類のデジブレインは追いついてしまい、体感速度が情報通信速度と同じになってしまった。

快適さを手に入れた代わりに時間を得て暇になった人類は、デジブレインへ稼働力たる

電気を供給する手段として、食事データや音楽データといった新しい刺激を作っては取り込むことでその暇を潰す。その結果人類のデジブレインは使えば使うほど摩耗し、最終的には脳回路の老朽化でやがて死を迎える。

皮肉にも、生命体であるデジモンの真似をしたばかりに。

それが、何を意味するか。

結局のところ、人類が膨大な時間を掛けてデジタルワールドに移住したところで、仮想重力の元歩いて、働いて、食って寝て、いつか死ぬ生活はあまり変わらなかった。

——残念なことに。

とどめに他人と連絡を取る手段にも不具合が起こった。情報通信速度の件に加え、デジブレインに直接アクセスを働く悪質なデジモンやハッカーの台頭で改竄、盗み取りが多発。リヴァースの運営を司るデジタルワールド側の管理者イグドラシル、及び人間側の管理者SYSTEMD・DAEMON達はそのセキュリティ規則をこねくり回した結果、古代の通信手法である「手紙」とほぼ変わらないものに帰着した。

滑稽なことに、情報通信は進化の果て、一番古い形にたどり着いたのだ。

エイトはそんな「手紙」の集積所、Simple Mail Transfer Protocol——つまりはSMTPサーバーで仕分け人として働いていた。

3

「生物ってどういうこと？ ペットロボット？」

エイトは相棒に問うた。

デジタルワールド・リヴァースに人間とデジモン以外の野生の生き物は生息していない。リアルから移住する際に、ノアの方舟のようにサンプルを集め、人間側のサファリゾーンにて保護されているのみである。

アイベロスはリヴァースから仕分け人に一人一体あてがわれる相棒であり、同時に監視者であった。

その彼が生物というならばそれはサファリゾーンから密猟されてきたものか、あるいはペット用に作られたロボットのことであろうとエイトは思った。

「いいえ。圧縮凍結されておりますが、内臓器官が稼働しています」

「内臓って……何だっけ？」

聞き慣れない言葉にエイトは目を瞬かせる。

「我々デジモンやリアルの生物が所持する生命維持に必要な体内の仕組みです。取り込んだ食物を消化、排泄する器官や息をするための器官、血液を循環させる器官など、様々な種類があります」

「ああ……あれね」

エイトはあまり関心のなさそうな相槌をうった。彼がリアルの人体について無知なもの無理からぬ事であった。

リヴァースの人間はデジブレイン以外の臓器を持たない。

死んだ人間の人格リソースはリヴァースの中央サーバーに保管され、一人死者が出る事にそこからデータが初期化されて引つ張り出され、再帰呼び出しされる。

輪廻転生リリシカネーションと呼ばれるこのシステムは、人類がリヴァースの人口を一定に維持するための仕組みで、人類はある程度社会性と生活知識が身に付いた十歳程度の身体でこの世に放り出され、またすぐ社会の歯車となつて生きていく。

リヴァースの全人類、強くてニューゲーム、というやつだ。

だから生まれて十ヶ月しか経っていないエイトも、既に肉体は十二歳程度で、社会の中では第二新卒くらいの位置合いだつた。

ちなみに、リヴァースが作られた当初、男がどうだ、女がどうだと人類が散々揉めたおかげで性は産まれた時に自らどちらか好きな方、または性別なしを選ぶことができる。役所に届け出れば変更も可能である。が、生殖行為が不要なため、男も女もほとんど変わりはない。

生きるとはどういうことかを最高まで効率化した結果、余計なものガベージは全て捨て、人類そのものすらリソースと化した。その末に余計なゴミを排出するもの——内臓は遥か昔にオミットされたのだ。

最早デジモンの方がよっぽど人間らしい。

最も、そんなことを気にする人間はとうの昔に死に絶えているが。

「結局、この生物はどうすればいいかな？ さつき宛先と発送元を調べてみたけど、どうやらこれ、偽装ダミーみたい」

「生物の添付はメール運搬規則違反です。我々の返送可能権限を越えています。管理者への報告が必要です」

「わかった」

エイトとアイベロスは生物の箱を抱えると、黙々と働く同僚達に軽く挨拶してオフィスを後にした。

4

人とデジモン、店とネオンでごみごみしたシブヤ。

擬似太陽で照らされた空に蝶のように大量の手紙が飛んでいる。

メールがチューブのような透明な回線を通じてサーバー同士を行き来しているのが見えるのだ。信号無視したメールがたまに衝突コリジョンを起こして落ちこちてくるのはご愛嬌である。

シブヤブロックのあちこちには青く光る通信回線——ファストトラベルシステムが張り

巡らされ、そのポータルの入り口から人々やデジモンが乗っては降りてくる。これに乗れば重要ポータルまで移動ができるのだ。特にシブヤには駅がある。シブヤ駅からは電車型デジモンのトレイルモンが各地の別の駅まで人々やデジモンを運ぶ。ポータルはハッカーなどの妨害を考慮して近距離同士の移動しか設定されていない。いわばエレベーターのようなものだ。長距離の移動にはトレイルモンが欠かせない。

また、シブヤ駅には他者を背や体内に乗せて空を飛ぶ、タクシーやバスを運営するデジモン達の待機場所もあるが、空中で襲われてこれを撃退する実力を持つ者だけがこの仕事に就くため、運賃は割高。トレイルモンの方が安価で安心だ。

シブヤブロックにここまで大きな駅があるのは、かつてここに大きな人間の鉄道の駅が存在していた名残だそうだ。

「それにしても、本当に重たいなあ……」

人いきれの中をえつちらおつちらと箱を運びながら、エイトは文句を言った。

すれ違う人々はみなリヴァース人らしくどこか空虚な表情で、ぼんやり歩いている。

それらを避けていくのはなかなかの苦行だった。

エイト達が向かっているのはシブヤブロックの市役所。つまりシステム管理ブロックだ。歩いて二十分ほどかかる。移動すらいつハッカーの妨害に遭うかわからないため、公務中のファストトラベルシステム利用は禁止されている。

本当に面倒だ。いつの時代も公務員は辛い。

「マスターはメールより重い物は持ったことがありませんからね」

「そう思うなら代わってくれないかなあ……」

「責任者はあなたですので」

「けち」

エイトは四角四面な返事しか返さないアイベロスに悪態をつく。

「いいよ、重力キャンセラーを使うから」

メール転送エージェントが使う貨物運搬用のプログラムを起動しようとして、エイトが箱を抱え直した時だった。

本日二回目の予想外の出来事がエイト達に襲いかかった。

5

「ケヒヒヒ！ 待ちな！」

「何でしょう？」

突然、彼等の前に下卑た笑い声を上げながら数体のデジモンが立ちはだかった。周りの者達が迷惑そうにそれを避けて行く。

赤いモヒカンのような毛に緑色の体皮。襟ぼろを身に纏い、棍棒を手にした小鬼のような

その種族は――。

「ゴブリモン、何の真似ですか？ そこを通してください」

デジモンには成長レベルが存在する。通常は下から「幼年期Ⅰ」「幼年期Ⅱ」「成長期」「成熟期」「完全体」「究極体」となっており、上位に行くほどその個体数は少ない。

人間の都市部では究極体にはほぼお目にかかれない。

また、彼等は五つの属性を持つ。周囲の環境や自分の縄張りを守るように働きかける「ワクチン種」、周囲の環境を自分の住みやすい環境に変化させる「ウイルス種」、周囲の環境に自分を合わせて生息する「データ種」、その場に応じて変則的に属性を変える「ヴァリアブル種」、そしてどれにも属さない「フリー種」だ。

ワクチン種はウイルス種に、ウイルス種はデータ種に、データ種はワクチン種に優位であるという三すくみが存在する。

エイト達の前を塞ぐ小鬼達――ゴブリモンはこのうち成長期のウイルス種である。市井では窃盗や恐喝などなんでもござれの柄が悪いデジモンとして認識されている。

ウイルス種を天敵とするデータ種のトウルイエモンであるアイベロスは、何を感じ取ったのかエイトを庇って前に出た。

嫌な予感通り、ゴブリモン達はニヤニヤしたまま太い腕をエイトへ突き出す。

「にーちゃん達！ オレたちやその荷物に用があんのよ！ そいつを寄越しな！」

まじに見た目通りのチンピラめいた言葉にエイトはため息をついた。

「……白昼堂々追い剥ぎですか？」

どうやら、相手はこの箱に目をつけて奪いに来たらしい。

ひとまずエイトは穩便に断りを入れる。

「申し訳ございません。こちらはお客様の荷物です。お渡しする訳にはまいりません」

「へへ、抵抗するなら痛い目に遭うぜ？ 悪いことは言わねえから大人しくそいつを渡しな！」

まるで西暦の時代の長編動画の悪役の台詞。

しかし。

「お断りします。……例え荷物が何だろうと、無事にあるべき場所まで届けるのが僕の仕事です」

それがエイトの信条だ。

彼は相手の暴力的な威圧に対し、声も乱さず言い切った。

途端にゴブリモン達はいきり立つ。

「ケッ！ 下手に出りゃあ、つけあがりやがって！ やつちまえ！」

「おう！」

リーダーらしきゴブリモンが号令をかけると共に、三体程が進み出てくる。周りの人々

がざわつきながらエイト達を遠巻きにした。リヴァースでは警察組織ポリスエージェントに通報しても到着までに時間がかかる。そもそも郵便の速さでしか通報が届かないのだから無意味にも等しかった。デジモン側にも自警組織があるのだが、滅多な事では人間の都市には現れない。ギラギラと殺気立った瞳で棍棒を手に打ち付けるゴブリモン達を見て、エイトはやはり冷静に嘆息した。

「最初っから下手になんて出てなかったじゃないか……」

そしてエイトが顔を上げた瞬間、彼等の纏う空気が激変する。

「仕方ないな……アイベロス」

「はい、マスター」

エイトの言葉と共にアイベロスが飛び出した。彼は腕に「兎角鉄爪とかくてつそう」という変形式の爪を装備している。脚力で敵を攪乱し、兎角鉄爪を生かした拳法の技で戦う事を得意とする。

「こいつ……護衛か！」

「構うな、相手はデータ種だ！ 囲め！」

アイベロスを取り囲もうとした三体のゴブリモンに対して、彼は一瞬にして高く跳躍して彼等の頭上に躍り出た。

「おあ!？」

「どこ行った!？」

標的を見失った小鬼達にめがけて、アイベロスは蹴撃と鉄拳の雨を降らせる。

「ガントレット 厳鬼烈斗!」

「ぎゃあっ!」

「ウゲッ!」

トウルイエモンは成長期より上のレベル、成熟期のデジモンだ。リヴァースに生きるデジモンはレベルが上がれば二のN乗倍ずつ能力が向上していく。つまるところ、アイベロスはウイルス種に不利なデータ種とは言えど、下位レベルのゴブリモン数体程度ならば引けは取らない。

あつという間に三体のゴブリモンは脳天にクリティカルヒットをもらって倒れ伏した。

「……侮ってもらっては困ります」

華麗に着地したアイベロスが拳を構え直した。

これが、MTAがMAILERDÄMONを連れてくる理由だ。ゴブリモンのようにメールにちよつかいを出してこようとするとするハッカー、デジモン達から荷物を守ること。これこそがMTAの本当の仕事なのだ。

怯む相手に対してエイトが言い聞かせるように優しく告げた。

「悪いことはありません。大人しく諦めてください」

あえて相手と同じ台詞でご退場を願うが、残念ながらゴブリモンのリーダーは諦めな

い。

「ちくしょう、こうなったら全員でかかれ！」

「……どつから湧いて出たんだい？」

リーダーが甲高い指笛を鳴らしたかと思うと、何処からともなくワラワラと新手のゴブリモン達が現れる。その数、両手の指では足りない。

アイベロスは目先に振りかぶられた棍棒をサツと避け、たたらを踏んだ相手を仲間に蹴り付けてまとめて足止めする。その隙に背後から迫った一撃は右手の兎角鉄爪で跳ね上げ、ガラ空きの胴に拳の一撃をくれてやった。さらに逆方向から向かってきた相手は回し蹴りで一閃する。ついでに倒れかけた相手を踏み台に飛び上がって、数体の頭部をまとめて蹴り倒した。

だがまた横から新手。蹴散らしても蹴散らしてもキリがない。

ここで初めてエイトは困ったように眉を下げた。

「……これは、数が多いな」

「マスター……」

ついにはエイトごと召し捕るように包囲網を形成してきたゴブリモンの群れに、アイベロスも険しい顔つきになる。一体一体の精度は低くとも数は力になる。

「がはは！ そのまま捕まえろ！」

リーダーの上品な笑いが聞こえた瞬間、エイトは腹を括る。

最初はただ偶然目を付けた荷物を奪う追い剥ぎデジモンなのかと思った。だけど、これは違う。ますますエイトの中で箱の中身への疑念が深まる。

いくらゴブリモンが徒党を組んで追い剥ぎを働くのが珍しくないと信じていても、ここまでの数は不審だ。ここまで大勢のゴブリモンを動かせるなら、それはもう誰かが意図的にこの荷物を狙っているのだ。

ならば、エイトがすることは一つ。

「そこまでしてこいつが欲しいのか。……仕方ない」

エイトは荷物を地面に下ろすと右目に右手を当てる。

瞬き一つで角膜のスマートレンズが分離し、天文盤アストロラーベのような紋様を描いて手の中に小さなエータッチディスプレイが形作られた。

デジヴァイス。

リヴァースの人間が一人一台所持するデジブレインに直結した多機能端末だ。普段は目と一体化しており、視覚情報の解析、メールを始めとした通信の送受信、デジブレインへの電力供給手段、買い物等、ありとあらゆるリヴァースの行動を補助する。各種データバンクへのアクセスは、デジタル予測アルゴリズムと仮想サブスペース通信によって光速を超える代わり、デジブレインでは処理できない超高等次元言語であるため他人のデジヴァイスとの直接通信はできない。これを行なってしまえば回路が混戦して最悪全人類の意識

が溶け合い個別性が失われてしまうからだ。

そして、中でも公務員、特に一部のエージェントにしか解禁されない機能がある。それは――。

「アイベロス、完全体進化プラグインを使う！」

「了解しました」

アイベロスの勇ましい返事を受け、エイトは胸につけていた封筒のマークを象ったバツジを引き剥がす。

そして大音声で暴発防止の起動コードを唱えながらデジヴァイスの端子に突き刺した。

「完全体進化プラグイン、バージョンMAILER・DEMON、ナンバー22！ アン

ティラモン、起動！」

「承認しました」

「うおっ!? 何だ!?!」

次の瞬間、アイベロスの身体が青白く光り輝くコードの渦に取り囲まれる。

進化フィールド。

デジモンがより上位のレベルへ進化する際の繭のようなものだ。フィールドそのものが爆発的な力を放つ。その輝きに気圧されてゴブリモン達は後退った。

「トウルイエモン、進化……!」

光の中でアイベロスの姿が音をたてて変化していく。未熟な格闘家のテクスチャは剥がれ、フレームがより巨大になっていく。兎の名残りはそのままに、赤い軽鎧、梵字の入った白い胸当て、紫のマフラーを身につけて神々しく成長する。

やがて進化フィールドを抜けて姿を現したのは、「十二神<sup>デューザ</sup>」と呼ばれる十二支をモチーフにしたデジモンの一体で、大きな腕を持つ兎に似た聖獣型、データ種の完全体。その名は――。

「アンティラモン……」

「馬鹿な、進化だとお!?!」

ゴブリモン達は度肝を抜かれたように慌てふためいた。

無理もない。完全体以降へのデジモンの進化は頻繁に起こる物ではない。強力なデータを取り込んだり、研鑽の果てに身につけたり、あるいは膨大な時間の果てに悟りを開いた結果であったり。真の実力者といえる者のみが入れる力だ。

「電子獣<sup>電子マ</sup>使いの協力による進化……大昔の大戦の時に封印された手段じゃなかったのかよお!」

エージェントであるエイトに解禁されているデジヴァイスの特殊機能。それはパートナーであるデジモンをエージェントのデジブレインに紐<sup>リ</sup>づ<sup>ク</sup>け、デジモンが人間の感情値を吸収して力に変える事を利用し、使用者の感情値を上乗せして任意に進化させるプラグイン、つまりは性能拡張プログラムの適応機能だった。

ゴブリモンのリーダーの言う通り、この技術は過去の争いの果てにリヴァース運営部によって禁忌とされたはずなのだ。

MAILERDAEMONの語源、ダイモーン。それは悪魔ではなく、リヴァースの情報通信を守るための守護神の意だ。エイトは中でもトーキョーストレージの内ですら体だけに使用を許可された、特殊進化プラグインを持つエージェントだった。

そして彼らはこう呼ばれる。電子獣使い。  
テイマーと。

72体のデジモン達はみな神の使いや聖獣をモデルとした存在が多く、一体一体が守護神のコードネームをつけられている。彼の相棒がアイベロスという固有名を与えられている所以だった。

「アシパトラヴァアナ……」

進化前よりも静謐に、しかし悪き者へは苛烈な怒りを放つアイベロスは、両の腕を切れ味鋭い宝斧オオアイに変化させる。そして嵐の如くゴブリモンの群れへと襲い掛かった。

「嘘だろ!？」

「こんなの聞いてねえよ!」

「逃げる……ぎゃっ!」

宝斧の一撃一撃で刈り取られていくゴブリモン達は、逃亡も間に合わずみな力尽きてデータの欠片となって消滅する。

デジモン達は皆「デジタマ」と呼ばれるデータの卵から生まれ、死ぬと一度冥府エリアで裁定を受け、許可を受けた者はまたデジタマへ戻り「始まりの街」と呼ばれる場所で羽化を待つ。人類が真似たリーンカネーションシステムそのものである。

ゴブリモン達のデータも死後のシークエンスに従って冥府エリアのある方角へと飛んで行った。残ったのはアイベロスに意図的に生かされたリーダー一体のみだった。

エイトは生物の箱を抱え直すと彼に問いかける。

「さて……、残るはあなただけですな?」

「ひ、ひい……」

にじり寄るエイトとその背後の守護神の姿は、リーダーにとってさぞ悪魔デーモンのように映ったであろう。

6

「よく来た。我が愛し子達よ」

まるで古の神殿のような建物。その中にはネオンカラーのコマンドラインパスが細流のように四方八方から流れ込んで脈打っている。その最終地点、構えられた玉座から、銀嶺の髭をたくわえた恵比寿顔の巨大な老人が声をかけてくる。あたかも謁見を受ける主神の

ように。

ここはリヴァースが稼働し始めた時代から存在しているシステム管理者ブロックで、彼の名はSYSTEMD D AEMON。アスモデウス。SYSTEMD D AEMONはリヴァースを司る上級AIで、アスモデウスはその中でもメールサーバーシブヤブロックのサーバー局長であり、リヴァースの稼働初期から動き続けているプログラムである。デジモン人、とも言えるような存在であった。SYSTEMD D AEMONは正にリヴァースの生き字引と言える存在で、リヴァース人はみな老人の姿に至る前に寿命を迎える。老いているのはD AEMONの証であった。

D AEMON達にとって、リヴァースの生物達はみな自らの子供のようなもの。故に彼等はエイト達を「愛し子」と呼ぶ。

「お久しぶりです、アスモデウス」

エイトは挨拶する。実のところアスモデウスに面会するのは人生で三度目であった。一度目はこのシブヤブロックに配属された時。そして二度目はデジモンとのシンクロ度の高さが見込まれてテイマーに任命され、特殊進化プラグインを授与された時だ。

「本日はどうしたのかね」

アスモデウスは穏やかにたずねた。

「メールの添付に異様な荷物が紛れ込んでいたんです。そして、ここへ来る道中、この荷物を狙ったゴブリモンの群れに襲われました」

「そのゴブリモンは？」

「誰かに金を掴まされて荷物を取ってこいと言われただけだと。アイベロスが片付けました」

エイトの隣にはトゥルイエモンまで退化したアイベロスがいる。

完全体の姿を保ち続けるには多くのエネルギーがいる。必要のない時はこのようにトゥルイエモンのまま活動しているのだ。

「宛先および送信元は偽装されて発信元がわかりませんでした。荷物の検閲をお願いいたします」

「ふむ。みせてごらん」

エイトがアスモデウスの前に例の生物データを掲げた。まるで神に供物を捧げる所作にも見える。

アスモデウスは箱に手をかざす。すると、凍結された箱がまるでリボンを解くかのようにするすると花開いていった。

その中身を見てエイトは気味悪そうに顔をしかめた。

中には八十センチメートル程の、人間を小さくしたような生き物が入っていた。

兎の絵が描かれた小さな衣服をまとい、頭は大きいのに、手足は小さくふにゃふにゃで、不格好にむちむちしている。

「うわ、なんだこれ。……実験の失敗体？」

エイトがそう判断した次の瞬間。

「う……えつ、えつ……ぎゃあああ!!」

「ひえっ」

生物が顔をみるみる間に赤くさせたかと思うと、響き渡った八十デシベルを越える大音量にエイトは思わず身体を仰け反らせた。耳をつんざくような音だった。

アイベロスが垂れた耳を塞ぐ。

「ほおう……これは、人間の乳飲み子か」

対象的にアスモデウスは皺に囲まれた目を弓形に細める。

「チノミゴ？ 何ですか、こいつは？」

聞きなれない言葉をおうむ返しにするエイトに対し、アスモデウスはゆつくりと説明を始める。

「よく聞きなさい、エイト。この子はリアルワールドに残った人間の一族の子供だ」

「……リアルに残った人間？ 子供って？」

この化け物みたいな奴が、人間？

コドモとは何だ？

エイトはますます顔をしかめる。

「ぎゃあああ！ まんまあ！ うあああああ！」

「おお、よしよし。怖かったのだね」

アスモデウスは喚き続ける小さな人間を掌に乗せるとゆつくりと揺する。

「ふうむ、首は据わっている。少し母親を呼ぶ言葉も。……うむ、十ヶ月といったところか。……エイト、君と同じ年だよ」

「はあ？」

こんなのが自分と同じ年？

聞き捨てならない上司の台詞にエイトは目を剥いた。

「エイト。君はかつて人間がリアルワールドで暮らしていた頃を、知っておるかね？」

「いいえ」

エイトは首を振った。だって今までそんなこと知る必要もなかった。遙か昔の人間がどうやって生きていたかなんて、西暦の人間が石器時代の暮らしに思いを馳せるようなものだ。専門家でもない限り日常では気にもかけないだろう。

アスモデウスは相変わらずうるさい人間を揺らしながら御伽噺を語るように続ける。エイトは諦めて耳に騒音フィルター機能をかけた。

「かつて人類は、今の君たちと違い、母親が父親から種を得て体内で子を作り、子は母親から栄養を供給されて成長した後、体外に出るような繁殖形態を取っていたのだよ。これは母親の体内から生まれて、十ヶ月しか経っていない人間の姿なのだ」

その事実にはエイトはさも薄気味悪そうに震え上がった。

エイトには親という存在は馴染みがない。いるとしたらこのアスモデウスなのだろう。その腹の中から出てきただって？　なんてグロテスクな！

「うげえ、何ですかそれ！　寄生獣じゃないですか！　それに何でこんなに小さいんです？　全部非効率ですよ！」

エイトの狼狽っぷりにアスモデウスは愉快そうに肩を揺らす。

「ほつほつほ。しかし、かつては皆そうやって生まれていたのだよ。皆このように未熟な姿で生まれ、最初は歩けもしない。少しずつ、少しずつ成長を重ねる。未熟な姿を、乳飲み子、赤子、親に対して、子供と呼ぶのだよ。今の君くらいの姿になるのは……十年はかかるだろうね」

「嘘だあ……」

上司の言葉がとても信じられず、エイトは顔を真っ赤にして喚いている。赤子を見つめた。つまりは何か？

この生物はリヴァースの人類が遙か昔に放棄した繁殖の方法で生まれた、いわば生きて化石のような存在だということか？

エイトは素直にそれを口にする。

「でも、何だつてそんな化石みたいな奴がここにいますか？」

エイトはリアルワールドにほんの一握りの人間が住んでいることは知っていた。

だが彼等はよつぼどの物好きか、未開の生活を好む古びた人種なんだろうと思つていて。そんな変わり者達の子孫が何故ここに？

アスモデウスは慈愛に満ちた目で赤子を見下ろす。

「最近リアルワールドにちよつかいを出して、珍しい物を盗み出しては高く売り捌く物好きな密猟者が出没し始めたのじゃが、よりにもよって人間の赤子に手を出すとは……可哀想に、親から無理やり引き離されて攫われて来たのだから。密猟者どもは赤子の扱いなぞ知らぬ。故に電子データのように凍結して送ろうとしたのであろう」

「物好き……。リアルに住むとか、行くとか、そいつの気が知れないよ」

呆れ返る彼にアスモデウスは優しく問いかけた。

「本当に、そう思うかね？　エイト」

「アスモデウス……？」

老A Iは銀嶺の髭をさすると一つうなづく。

「そうか。君たちはもう、古き盟約を忘れておるのだね」

「え？　古き盟約……ですか？」

上司の話がわからなくなつて、エイトは眉根を寄せる。

アスモデウスは姿勢を正すと厳かに告げた。

「ならば私から一つ、君に仕事を与えよう」

「はい、何なりと」

仕事と聞いてエイトは背筋を伸ばす。

アスモデウスは赤子をゆつくりとエイトの前に差し出した。むちむちとした人間の幼体は喚き疲れたのか再び眠っている。

「この子をリアルワールドへと送り届けなさい」

「えっ」

「親には刹那の神隠しといえど、この子は一人。早く親元へ返してあげなさい」

「アスモデウス……」

困ったように上司を見つめるエイトに対し、アスモデウスは悪戯を咎めるかのような、諭すような口調で背を押した。

「行つておいで。そしてリアルの人間に直接話を聞いてみるといい。何故、リアルに残っているのかとね」

「……承知しました」

今正に、そんな所にちよっかいを出す奴の気が知れない、と言った舌の根も乾かぬうちにリアルへ向かわねばならなくなったエイト。不承不承の彼の答えを聞いて深くなったアスモデウスの皺を見て、彼はやはり僕にとって親というものがあるならば、それはこの老AIなのだろうと思った。

「それではこの子は任せたよ。抱き方は……右手を首の後ろに、左手で尻と背を支えて……そうだ」

アスモデウスから抱き方を教えてもらい、エイトは腕に赤子を受け取る。

第一に思ったのは、

「思ったより、重いですね」

だった。

暖かく、着ている服はふかふか、髪はちよろちよろ。先ほどまでは気づかなかつたが、小さな前歯が生え、首の周りにはライオンのたてがみのような謎の布がついている。

そして、不思議な良い匂いがした。

「よく食べ、よく育っているのだろう。結構なことだ。道中の世話については、サーバー立図書館に古の書物が残っていたと記憶している。参考にしなさい」

「わかりました」

その後、詳細としてアスモデウスから下されたのは、赤子を守りながらナリタ国際デジタルゲートへ向かい、そこからリアルワールドへリアライズせよ、という任であった。

デジタルゲートとはリアルワールドとリヴァースを繋ぐ総合物質転送ポータルだ。潜るだけでサイバースペースのデータとリアル物質を交換してくれる。つまり、普通にリヴァースに生きている分には滅多と世話にはならない寂れた場所である。

「一つだけ。リアルワールドへ向かうならば覚悟して行きなさい。……たまに、帰つてこ

ない者もいる」

そう言って送り出したアスモデウスの言葉を、この時のエイトは深く考えることはなかった。

7

システム管理ブロックを後にして幾分も経たないうちに、エイト達の前には軽い人ばかりができていた。

「何だこいつ……」

「うわキツツツツモ」

「すげえグロ」

「みんな見て！ 今からメール配信やるよ」

「見たことねえ。レアデジモンか？」

彼らは皆、エイトの腕の赤子に向けてデジヴァイスを掲げる。好奇心から赤子を記録し、メールで送ったり、掲示板に貼り付けようとしているのだ。

リヴァースはある意味巨大なソーシャルネットワークサービスである。

多くの間人は新しい刺激を記録することに執心し、掲示板上で話題が燃え上がり、その癖一瞬にして熱は冷める。エイト達を取り巻く人間達も皆リヴァース人らしい起伏に乏しい表情で撮影をしては、一瞬で無関心に戻って去って行く。

「ちよつと！ 配達中です！ 退いてください！」

どいつもこいつも能面のような表情で無神経さだけは一丁前。タスクを妨げる羽虫バグのようなその集団をエイトは煩わしそうに追い払った。

ほとんどの者はそれで捌けていったものの、しつこい数名が残る。

「こいつ、もしかしてリアル人間？ 俺、超昔のアーカイブで見たことあるわ」

「リアルの人間？ サルじゃん」

「その頃のアーカイブなんて半分壊れたやつばっかでしょ」

「本当にサルっぽい」

ネットワーク上に特有の、たまたま知識を聞き齧っただけで大いにドヤる評論家気取りが赤子の正体に気づいた。直後に彼の背中に遠くから届けられたメール——どこかの掲示板からの大量のメッセージが読み待ちで列を成し始める。彼の投稿が赤子の動画と解説でバズったのだ。

エイトは内心舌打ちしたくなる気分で彼らを押し退ける。

「いい加減にしてくれませんか？ これ以上は……」

そう言いながら彼が胸のバッジをちらつかせると、途端に彼等は顔色を悪くさせる。

「あ、やば。エージェントじゃん」

「これだから税金むさぼってる奴は」

「エージェントだったのかよ。最初から言っとけ。ウザ」

どっちがウザいのかと悪態をつきたくなるような態度で彼らは足早に去っていった。

「……はあ」

ため息をつくエイトの元へ、最後の一人が歩み寄った。

そして赤子を指差してくる。

「ねえ、エージェントさん。それ、あたしに売ってくれない？」

「は!？」

声をかけてきたのは随分と身なりのいい女だった。

リヴァース人には珍しく、「無駄」が多い格好をしている。

無駄。つまりは鼻センサーが狂いそうな程の香料、香水の匂いや華美な爪、派手な化粧

に装飾品。テクスチャを金の力でフルカスタムした様相だった。

「申し訳ございません。護送任務中ですので、お売りできません」

「いくらからならいいの？」

「売らないと申し上げておりますが」

「あたし、ミナトブロックに住んでるの。ペットOKだから」

冷たくあしらうエイトに食い下がる女。どうやら珍しい物に金の糸目をつけない収集家

らしい。そこへアイベロスが割って入った。

「これ以上は公務執行妨害で排除いたします。お引き取りを」

「あつ、ちよつと待ちなさいな」

「失礼します」

追い継る女を振り切り歩を進めながら、エイトは嘆息した。

本当、この世界の人間は。

リヴァース人の特徴といえば特徴なのだが、とにかく「会話が通じない」。人類は情報

を好きな物だけ、大量に受け取る癖があった結果、遙か昔に比べ、コミュニケーション能

力の低下——相手の気持ちを汲む脳の機能が極端に退化しているのだ。

互いに無関心な癖に記録だけは欲しがる。

肉体を無くした結果、情報をコレクトすることが価値となる世界。

何て薄っぺらくて、最高につまらない場所だろう。

エイトはこういう経験は日常茶飯事だったから、その度に思っていた。

自分を含めたこんなリヴァース人どもに、存在の価値ありや、と。

一方、足早にシブヤ駅の方へ向かうエイトとアイベロスの後ろ姿をどこか空虚な表情で

見つめる女はぼつりと呟いた。

「やっぱり、エージェントは金じゃ落ちないか。Dの言う通りね」

「うう、んんー。んん」

「マスター、赤子が起きました」

揺れるトレイルモンのボックスシート。エイトの腕の中で赤子は目を覚ました。隣に座っていたアイベロスがそう報告する。

エイト達はシブヤ駅からナリタ国際デジタルゲートへと向かう特急トレイルモンに乗車していた。周りに乗客は全くいない。

「げっ、向こうに着くまで寝てればよかったのに……」

正直なところエイトの感想はそれだ。

彼は先ほどアスモデウスに言われた通り、ニホンサーバー立図書館から「日本げんき育児協会出版 あかちゃんのお世話」なるマニュアル本をダウンロードし、一通り目を通したところだった。赤子の世話自体が遙か昔になくなった習慣であるため、動画記録は残っていない。唯一残っていたのがこの「本」だった。西暦時代の本はデジブレインに直接データを取り込めない。エイトは生まれて初めて「読書」なる行為を行うことになった。それによれば、赤子というものはとにかく手間がかかるものらしく、寝ている以外は本当に何もできない存在だという。その癖、何でも口に入れようとする。

何と、栄養を摂ることすら自分ではままならないらしい。

なんでも、リアルの間人は下位レベルのデジモンのように口から栄養を取り込み、下半身から不用物を排泄するのだという。しかも生まれたばかりの頃は母親の母乳か人工乳を飲むらしい。十ヶ月ならば幸い母乳ではなく離乳食が始まっているとこのことで母親が居なくとも何とかなるらしいが、そもそも母乳というのは血液から作られるらしい。他人の血で命を保つというのも驚きだった。

何てめんどくさい生き物なんだろう。自分と同じ時間を生きている「人間」なのに。

「う、う、う……」

そうこう考えているうちに、赤子はまたあの時のようにみるみる顔を赤らめて息を溜め込み始めた。

「あつ、まずい。また泣くぞ、こいつ」

あの大量の喚き散らしは「泣く」という行為らしい。マニュアルによれば言葉を話せない代わりのコミュニケーション手段は全てこの「泣く」行為に該当するらしい。

「あああああああん！ まんまあ！ まんまあ！」

「あああ……ちょ、ちよつと落ち着いてよ」

大声で泣き始めた赤子は思ったより強い力でびちびちとエイトの腕の中で暴れ始める。

「ど、どうしようアイベロス」

「申し訳ありませんマスター、私は人間の赤子の介助方法は習得しておりません」

「だー、もう！ 君もマニュアル読んでよ！」

「わかりました」

大弱りで相棒に助けを求めてもすげない返事が返されるのみだ。エイトは八つ当たり気味にアイベロスへ育児マニユアルのデータ本を投げる。

アイベロスは素直にそれを開くと、目ぼしい記述を読み上げた。

「こういう時は……まずゆっくり揺らしてあやしてみましよう」

「あ、あやす？ えーと、ほ、ほーらよしよし」

とりあえず立ち上がったエイトはアスモデウスがやっていた所作を思い出して赤子をゆらゆらと揺らしてみよう。しかし、効果がないばかりか赤子は更に激しく泣き出してしまった。

「ぎゃああああああ！」

アイベロスがしれっと付け加える。

「ただし母親や父親といった赤子が安心する方が実行しなければ意味がないようです」

「先に言つてよ！」

頼りにならない相棒だな！

他に乗客がいないとはいえ車内はパニック状態だ。こんな敵を倒すより厄介じゃないか。エイトの焦りは募る。

「あやすが駄目なら次のフロアは何なの!？」

「おむつが濡れていないか確認してみましよう。不快で泣いている可能性があります」

「おむつ?」

「赤子のうちは排泄が一人でできないため、それを吸収させる紙や布を着用させるのだそうです」

「ああ、これか」

「一般的な紙おむつは黄色のラインが緑色に染まっていれば取り替え時なのだそうです」

エイトは赤子のズボンの中を覗いて紙おむつのラインの色を確認する。

余談だが赤子は男の子だった。

「あ、本当だ。緑色になってる。こいつが原因か……っつていや待つて。替えなんてないんだけど!？」

「作るしかありませんね」

「……」

リヴァースでは何か物が欲しいと思えばその場で「作成」するのが常識だ。

リヴァース全体の通貨としては電力消費量を意味する「エレクトリカルポイント」、通称EPという仮想通貨が利用されており、EPをその場で支払ってデジヴァイスに欲しい物のデータを入力すると、デジヴァイスの3Dプリンタがそれを再現する、という仕組みだ。作成に使われる素材が高価であれば高価であるほどEPの支払いは高くなる。

そうして彼等は紙おむつ一枚をリヴァースで作るのが如何に高くつくか知ったのだ。

「何でこんな消費物にこんなバカ高い高分子吸水材が使われてるんだよ……僕のEPが」  
「リヴァースでは吸水を行う必要性がありませんからね」

西暦の記録を参考にして紙おむつを一枚作成してみたのだが、紙おむつ自体が古代の遺物な上に、現在ではほとんど使われていない素材を使っていたため、莫大な金額がかかってしまった。

そのお値段、何と五万EPである。

今日日、きょうびエイトの一ヶ月の給料は三十万EPだ。

「ええええん！」

「はいはい、五万EPのブルジョワ王子様、今替えますよ」

半泣きで赤子のおむつをくつろげたエイトはこれまた生まれて初めての悪臭に仰け反る羽目になる。

「くっさ！ 何だこれ!？」

「アンモニア、アセトアルデヒド、その他多数のガス濃度100ppmを越えています。長時間の摂取は危険ですね。臭気の元はこの腸の老廃物質……つまりは便です」

「昔の人間はこんなどうやって対処してたんだよ!？」

「臀部を濡れたペーパータオルで拭くか、水で洗い流しておむつを新しい物に交換していたようですな」

「そ、そつか。ならそれも作って……」

これ、経費で落ちるだろうか？

エイトは嘆く。

デジモンも下位レベルの頃は排泄をするものだし、むしろその形そのもののヤツすらいるのだから、流石にアレを見たことがないとは言わないけれど、ここまでケアしてやらなければならぬなんて話が違う。もしかしてアスモデウスが言っていた覚悟しろ、とはこのことだったのだろうか？

リアルの間人はこんな非効率的で不衛生な行為を一日に何回も行っているなんて！

エイトが脳内で愚痴を繰り返していた時だ。

「あのお、お客さんすみません。何か変な物持ち込んでます？ なんか車内からアンモニアガスのすんごいクセえ臭いがすんですけれど。異常検知に引っかけかかっているんですよ」

「えっ」

彼らの後ろから申し訳なきように声をかけてきたのは、このトレイルモンの車掌デジモンだった。

異臭の異常検知。

原因は明白だった。

あわててデジヴァイスを使用済みおむつにかぎず。

「す、すみませーん！ 急速範囲凍結！ Zip おむつ.zip おむつ！」  
車内にエイトの声が響き渡った。

9

「信じられないよ！ 今月のお小遣い飛んじやったよ！ しかも超くつきかったし！」  
エイトは立ったまま片手でデジヴァイスをいじりながらぷりぷりと文句を言った。その逆の手には「おむつ.zip」と書かれた凍結ファイルがある。

先程彼は郵便物を凍結圧縮するプログラムで大慌てでおむつごとデータ凍結するという滑稽を働くことになった。これで匂いの問題は解決するだろう。この憎きおむつ.zipはデジヴァイスにしまつて後ほど毒物処理センターで処分してもらおう。

ちなみにその騒動の中、アイベロスはじつと赤子を抱っこして座っていただけである。不思議とアイベロスが赤子を抱くと大人しくなるからだった。

赤子は今、アイベロスの垂れ耳を引っ張って遊んでいる。

小さくてかわいいものが好きなアイベロスはヨダレがつこうが装飾品を食まれようがお構いなしだ。鉄爪が傷をつけないよう気を払っている。

「本当、リアルの人間って面倒臭いんだな」

エイトは赤子の頬を指先でつつく。ぷにぷにでツルツルだ。気持ちいい。

「あうあ」

「あ、笑った」

その時赤子はくすぐられたのがおかしかったのか、頬をゆるめて初めて笑った。

そのぷくぷく丸みを帯びた頬が持ち上がった瞬間、エイトのデジブレインに何とも言えぬ痺れが広がる。

感情値の天秤が呆れからまあいいか、にゴトンと切り替わった。

ひとりごちるのは何度目かわからないが、本当にこれが自分と同じ年とは思えない。

「マスター。今のあなたの感情値から楽しいと伝わってきますよ」

「え？」

アイベロスの言葉にエイトはきょとんと目を見張る。

「先ほどの騒動。あなたは面倒臭いと言っていましたけど、その実、楽しんでいたようですよ」

「お見通しか……」

デジモンとテイマーはデジブレインでいつでも即座に同期するために、常に細いパスで繋がっている。アイベロスはそれを読み取ったのだ。

テイマーの条件として、リヴァース人に求められるもの。

それこそ失われて等しい高い感情値だった。

エイトはリヴァース人の中でも比較的感受性が豊かであったからこそ、デジモンの進化の条件を満たせるほどのテイマーとして選出されたのだ。

アイベロスがエイトから感じ取ったのは、悪漢から赤子を守らねばならない使命感。

そしてなにより、未知の体験への強い好奇心だった。それは喜怒哀楽のうち「楽しい」に分類されていた。

「……こんなに小さくても、脳も、体もちゃんと動いてるっておもしろいからね」

大泣きに翻弄され、おむつが臭いと騒ぎ、笑顔に安堵を覚える。

全く泥臭く、スマートじゃない。

それでもこの生き物の抱える不便が興味深い。悪くない。おかしい感情だった。

「何だか僕、今日一日で、生まれてここまでの人生分の初めての感情値をいくつも更新した気がするよ」

エイトは脱力しながらそう述べる。

「そうですね。マスターは生まれてほぼすぐに私と出会いました。その時からの記録をさかのぼっても、今日ほど喜怒哀楽の感情値の振幅が多かった日はありません」

「……君との付き合いつて、そんなに長かったっけ」

エイトは軽い驚嘆をもってそう返す。

彼にとつて、アイベロスはもうずっと隣にいるのが当たり前な存在だった。

生まれてすぐに受けた業務適正検査で、エイトはリーンカネーションシステムの導きにより、自分の「前世」である誰かがこの業務に就いていたことを知った。

だから何の疑問も持たずに高い適正のあるエージェント職に就職し、一番相性がいいとされるアイベロスと引き合わされた。

その時点でアイベロスはもうエイトよりだいぶ大人だった。だから随分といろいろなことを彼から教えてもらったし、就任してもう次の日には実践で敵を殲滅していた。彼と残した業績が評価されて特殊進化プラグインを授与された時は、盆と正月が一気に来たように喜んだ。……盆と正月とは何か知らないけれど。

そこまで回想して、エイトはふと思に至る。

生まれてすぐ、僕とずっと過ごしてきた存在。

もし自分に親がいるならそれはアスモデウスだと思った。でも、それはアイベロスこそそう呼ぶのが相応しいのではないか？

しかし、アイベロスにそのラベルを貼ろうとすると、どうしてもデジブレインの内がひっかかる。

そうじゃない。

その言葉じゃない。僕と彼はもつと何か別のカテゴリで――。

「ああもう、考えるのも疲れた！ 僕も充電するよ！」

エイトは嘆息するとアイベロスの隣にどかりと座りこんだ。ナリタ国際デジタルゲート

へまではあと三駅ほどある。腹ごしらえならぬ脳ごしらえをしておきたかった。

デジヴァイスに食事データを呼び出す。

スモークチキンとアボカドのサラダサンド。エイトとアイベロスのお気に入りだ。

これをどうするかというと、

「いただきます」

という掛け声と共に額に押しつける。

こうすることでデジヴァイスからデジブレインへ、食事データと共に十マイクロボルトほどの電気がEPを消費してワイヤレス充電されるのだ。

途端にデジブレインがスモークチキンの香ばしき、アボカドの甘み、オーロラソースの酸味、バンズを咀嚼した時の柔らかさを認識する。

——経験を食う。

これがリヴァースの人間の食事である。ちなみに、食事データは一度購入してしまえば何度でも繰り返し使えて経済的だ。

「ごちそうさま。……アイベロス、君の分も作ろうか？」

脳がくちくちくなって、いく分か機嫌が良くなったエイトはアイベロスにもサラダサンドを作ろうか提案する。アイベロスは経口で食事をするからだ。

「はい、いただきます——」

アイベロスが赤子を揺らしながら答えようとした時だった。

10

《警告！ 警告！ 走行中のトレイルモンの半径五メートル以内に接近することは鉄道運営法で禁じられている！ ただちに距離を取りなさい！ 繰り返す！ 走行中のトレイルモンの半径五メートル以内に接近することは禁じられている！》

「何だ!？」

突然トレイルモンの外部へ向けて大音量の警告放送が流された。

エイトは身を乗り出して窓の外を覗く。そしてトレイルモンから警告を与えられた主を発見した。

「あれは……スパロウモン！」

トレイルモンぎりぎりに接近し、まるで駆け比べのように低空飛行をしかけているのは、小型のジェット機のような姿に両手に銃を携えた成長期、鳥型のデジモン。スパロウモンだった。空戦に特化したデジモンである。

「なんでこんなところに……」

スパロウモンは大空を自由に駆け巡る気分屋で、滅多と都市部の、ましてや地上を走る存在と駆け比べなどしない。エイトが訝しげに呟いたその瞬間。

まるでエイトの言葉に気づいたかのようにスパロウモンと目が合う。

その刹那、スパロウモンが両手の銃を構えてにやりと笑ったのが見えた。

「マスター、危ない！」

その直後、赤子を抱えたままのアイベロスがエイトの襟首を引つ掴むと、大きく跳躍して客車の端まで飛び退った。そのタイミングとほぼ同時に、先ほどまでエイト達が座っていたボックスシートの辺りが大きく爆散する。

スパロウモンの砲撃を受けたのだ。

天井には穴が空き、凄まじい風圧の気流が車内で渦を巻く。もうもうと立ち込める煙がそれに巻き込まれてあつという間に視界が悪くなる。更にほのかに火の手まで上がりはじめた。

《緊急事態発生！ 緊急事態発生！ トレイルモンナリタEX01号は現在襲撃を受けています！ まもなく緊急停車いたします！ お乗りのお客様は順番にご案内いたしますので車掌に従って避難をお願いいたします！ 繰り返しします！ 緊急事態発生！》

「いのでで！ あつちい、体があつちい！」

トレイルモンが悲鳴を上げているのが聞こえる。

「な……！ なんてことするんだ！」

客を乗せて走行中のトレイルモンを襲撃するなんて前代未聞だ。

一瞬で地獄絵図になった車内に絶句するエイトをアイベロスが急かす。

「マスター、明らかにあの攻撃は私達を狙っていました！ ここは危険です！」

すると、このただならぬ惨状と、その鋭い声に怯えたのか、アイベロスの腕の中の赤子が泣き出してしまふ。

「ふえ、ふえつ……ええええん！」

その甲高い泣き声に反応して、空から第三者の声が降ってくる。

「そこか！ 見つけたゾ！」

「スパロウモン！」

「そいつをよこせ！」

エイト達を見下ろすように車両に並行して飛ぶのは先ほどのスパロウモンだった。

彼の視線の先には赤子を抱えたアイベロスがいる。そいつ、というのは間違いなく赤子のことだ。

暴風に耐えながらエイトは相手に怒鳴った。

「どうしてこんな事を！ トレイルモンの襲撃は人デジ安保条約違反だぞ！ 君達は通常デジタルワールドの高山ゾーンにいるはずだろ！ なんで人間の赤子を狙うんだ！」

かつて人間とデジモンが争いの果てに結んだ協定、人デジ安保条約。全く生態が異なる二つの種族が共存していくために取り決められた武力行使などに関する条約だ。

エイトがそれを持ち出すと、スパロウモンは癪に障ったように目つきを鋭くすると叫び

返した。

「知るカ！ お前達が先にヤツタんだろ！ オレの仲間を解放するにはそいつを連れて来いって言われてんだ！ お前らがルール破ったんだから、オレだってそうしただけだ！」  
「何だつて!？」

先にルールを破った……？ 一体誰が？

「……まさか密猟者でしょうか？」

「この赤子を攫った奴か！」

アイベロスの言葉にエイトは素早く思考を巡らせる。

スパロウモンは「仲間を解放してもらうため」と言った。つまり人質ならぬモン質をとられているのかもしれない。ならこのスパロウモンを倒すのは下策だ。敵の情報を引き出さなくては！

「待つんだ、スパロウモン！ 仲間を捕らえられているなら僕達が力に……」

「ウルサイ！ 人間と人間に味方する奴なんて信じられるカ！ サツサとそいつを渡せ！」

何とかスパロウモンを説得しようとするエイトを相手は一蹴すると、こちらに二丁拳銃「サナオリア」を向ける。そして躊躇いなく発砲してきた。

「うわっ！」

「マスター、こちらへ！」

再びアイベロスがエイトの首根っこを掴むと、砲撃を避け、三角跳びを繰り返して碎けた車両の壁を器用に登る。そして車両の屋根まで砲弾の嵐をくぐり抜けた。そして進行方向に背を向ける形でスパロウモンと対峙する。

「エエい、ちょこまかと……！」

同じ目線に上がって来られたスパロウモンが舌打ちをする。

「どうしますか、マスター。ここでは条件が悪すぎます」

アイベロスが警戒しながらエイトに指示を仰ぐ。

確かに彼の言う通り、揺れる電車の屋根という足場、こちらには赤子、更に向こうは飛行しており、こちらの近接攻撃は届かないという最悪な状況だ。

ついでにこれ以上ここで暴れたらトレイルモンの命が危ない。

だが、エイトとてテイマーである。今まで幾度も修羅場をくぐり抜けた矜持が打開策を弾き出す。

「アイベロス、しっかり天井に貼り付け！ たぶんあと数秒で……！」

「もう逃さないゾ！ これでも食らエ！」

スパロウモンがサナオリアを構え直した時だ。

ギギギギギ……！！

突然エイト達の足元が大きく揺れる。トレイルモンが緊急停止ブレーキをかけ始めたの

だ。

「ぐっ！」

エイトは仮想重力加速に耐えて声を漏らした。

「ウワ!?」

慌てたのはスパロウモンだ。

目の前にいる標的が突然スピードを落としたのだ。エイト達に追突しそうになり、急旋回して避けようとする。

その隙をエイトは狙っていた。

デジヴァイスをスパロウモン目掛けて掲げる。

「今だ！ ネバネバネット作成！」

途端にデジヴァイスの3Dプリンタから作成された粘着力の強い網状の糸がスパロウモンを絡めとった。

ネバネバネット。

本来なら成長期、幼虫型のデジモンであるワームモンが放つ必殺技なのだが、エイトはEPというコストを払ってこれを再現した捕獲網を生成したのだ。

これがティマーの基本戦術。

白兵戦はパートナーに委ね、自分は指揮及び有利に立ち回れる戦況を作り出す。ティマーによつては環境変数を書き換えたり、パートナーに強化プログラムをかけて力の底上げを行う者もいる。

エイトはティマーの中でも抜群の構造解析の演算速度を持っていた。

彼が得意とするのが、分子レベルからの物理演算による補助アイテム・プログラムの作成で敵を攻撃、攪乱するというやり方だ。

だが、実践において冷静にデジブレインから必要な物理情報を引き出し、それを計算してデジヴァイスに出力させるには訓練とセンス、そして幅広い知識が必要だ。

ティマーの誰もが成し得ることではない。

その実力においてはエイトは上からも高く評価されている。

「ギャ!? 何だこれ！ くそ、こんなモノ……！」

狙い通りスパロウモンは全身を粘着網に封じられ、翼の先の爪で何とかこれを切り裂こうとジタバタ空中でもがき始める。その姿は隙だらけだった。

エイトは相棒に指示を出した。

「アイベロス！ 背中に飛び乗れ！」

「了解！」

アイベロスはエイトと赤子を抱えたまま飛び上がると、あやま過たずスパロウモンの背に着地した。

「はあ!? コラ、何する!? 降りろ！」

まさか狙った相手に背中に飛び移られるとは思わなかった戦闘機型のデジモンは、完全にウィークポイントを取られて狼狽する。

「これでいいんだろう？ スパロウモン」

「何だト!?」

エイトはそんな彼に笑いかけた。

「このまま連れてってよ。君の目的地。どうせこの近くに居るんだろ？ 君に命令した奴がさ」

「ナニ!?」

スパロウモンの驚愕の声が空に響いた。

11

あれから数十分ほど。

エイト達はスパロウモンを落ち着かせ、危害を加えない事を約束した。急所を取られても何も自分に攻撃を加えてこないことで、スパロウモンはようやくエイト達と話をする気になったらしい。

あくまで彼は「約束通り赤子を依頼人の元へ届けている」だけだから。

彼によつて、エイトはようやく赤子を狙う敵の正体を知った。

「密猟者グループ・アザゼル……。それが今回の主犯ですか」

アイベロスが大人しくなった赤子の背をゆつくり叩いている。

アザゼル。

それがエイト達の敵。墮天使の名を冠する者達。

「そいつらが、この先のデジタルゲートで待ち伏せしているのか……」

「そうダ。……本当に行くのか？」

スパロウモンはシブヤで群衆に撮られたエイト達の写真を掲示板で発見し、行き先を推理して追ってきたのだそうだ。現在スパロウモンは予定通りナリタ国際デジタルゲートへ向けて飛行している。そこでアザゼルと待ち合わせをしているのだという。

都市部から離れたこの近辺には砂塵の荒野が広がり、トレイルモンのルールが敷かれているのみだ。あと少しでナリタに着く。

「アザゼルは人間の犯罪者とそれに与するデジモンで構成されてイル。卑怯な手ばかり使う、厄介な奴らだゾ」

スパロウモンの話はこうだった。

最近リヴァースの富裕層の間では「レトロ」ブームなのだという。この場合のレトロとは西暦時代の文化を指す。不便だった頃の機械を使ってみたり、昔の資料の内容を再現してみたり。それが長じて一部の過激な層が、「リアルな物」の収集に血道を上げるように

なつたのだそうだ。

エイトの脳裏にシブヤ駅に向かう途中に出会った金持ちそうな女の姿が浮かぶ。

「あの時の女の人……！」

「噂じゃDって名乗るブローカーがリアルな体験を流行らせタそうダ」

リアルな体験。つまりは、かつて人類が捨てたはずの「経口の食事」を始めとした、「肉体を伴った快樂」だ。デジブレインでその経験を再生してみても、それはあくまで「脳がそう刺激されている」という電気信号を浴びている」にすぎない。

肉体があるとは、どういう感覚なのか。だが汚れたリアルワールドへ上がるなんて真つ平御免だ。何か手はないものか。

興味を抑えられなかった彼らは、Dというブローカーに唆され、手始めに手頃な人型に近いデジモンを捕獲して、その臓器を人間に適応しようと考えたという。

「そのデジモンの捕獲を担ったのが、アザゼル……！」

「完全に人デジ安保条約違反じゃないか！　なんて酷いことを！」

エイトは思わず吐き捨てる。

「オレの仲間も、そいつらに捕まっちゃったんだ。言う事を聞かないと解剖してヤル、つて言われて……」

スパロウモンが肩を落としながら告げる。

「奴ら、結局デジモンの内臓は人間だと拒絶反応が出るつて知つた。だから今度はリアルにいる本当の肉体を持つ人間を使おうと考えやがったんだ。生まれたばかりの人間は、細胞分裂が活発だから、クローンで部品が作りやすいつて言つてタ」

「……！」

エイトは息を呑んでアイベロスに抱かれた赤子に思わず視線を送る。

恐らく奴らはリアルからこの子を攫った後、仲間内で輸送しようとしたのだ。しかし、リアルの人間のデータの重さを知らず、簡易凍結して普通添付送信しようとしてしまった。そしてエイト達が赤子を保護したことに気づき、ゴブリモンを差し向けたのだ。更に赤子を売るよう持ちかけてきた女。彼女こそ、アザゼルと取引をする富裕層の一員だったのだろう。

つまり、奴らはこの子を、内臓の製造工場として使おうとしていたということか？

この子を？　こんな、何もできない無抵抗な生き物を？　不便で、無力で、他人の手を借りなければ生存できない。

それでも、笑うことができる、この人間を？

リヴァース人よりも、よっぽど懸命に「動いている」生命を？

いや、動いている、じゃない。もつとふさわしい言葉がある。

生きているんだ。

そう思った瞬間、エイトの胸にカッとたぎるような感情が生まれた。

「……許せない」

「マスター……」

エイトの感情を読み取ったアイベロスが珍しく驚きをあらわにする。

「さつき僕が楽しいって思った理由がやっとわかった。僕達より非効率で、不衛生で、不便極まりない。それでも、それこそがこの子が生きている証なんだ。僕は、きつと生まれて初めてリアルに触れた。それが嬉しかったんだ。この子は今、僕と同じ時間を生きている。それを……!」

ここまでできてようやくエイトは赤子を自分と同じ「生きている」人間と認識した。

ぎり、とデジヴァイスを握りしめた彼は、自身が熱くなり過ぎていることに気づくと、一つ深呼吸をした。

そしてひとまずこの話をアスモデウスへ報告しようと考えてる。

「アスモデウスに報告するよ。そうすれば、少なくともその成金趣味のバカ達やDって奴は検挙されるはずだ」

「それがよろしいですね」

アイベロスが相槌をうつ。

エイトは素早くデジヴァイスでメールを作成し、送信ボタンを押した。するとデジヴァイスから白い蝶の形をしたメールが浮き上がり、都市部の空目掛けて飛ばたいで行った。

「よし、これで――」

メールを見送りながらエイトが少し安堵した瞬間だった。

「そうはいかねエなあ……リーパーストライク!」

膨れ上がった悪意と冷たい声が彼らの前方から流れくる。

同時に懸命に飛ばたいていたはずのエイトのメールが、スパロウモンの進行方向からすれ違うように放たれたドス黒い閃光によって一瞬にして焼き尽くされた。

慌ててスパロウモンが急旋回し、狙い撃ちされにくいように高度を下げる。

「な……!」

「やっぱり失敗しやがったか、スパロウモン」

言葉を失うエイト達に再び声が飛んでくる。

「砂!」

警戒するエイト達の行手に軽い砂嵐が巻き起こった。その中で大柄な何かが蠢く。バサリと羽音が舞い、迷彩マントを脱ぎ去ったのは、白い蓬髪にコンドルのごとき頭骨を被り、黒いサバイバルスーツに赤い翼、左肩にはサボテンのような肩当て、右手に大鎌が取り付けられたスナイパーライフルを装着した鳥人型デジモン。

「お前ハ……バルチャモン!」

バルチャモン。

なによりも自分の利益を優先するという冷酷無比な完全体、ウイルス種。砂塵の死神と

恐れられ、圧縮した砂を撃ち出すライフル「CND・96」の優れた消音性能を生かした狙撃を得意とするデジモンであった。

スパロウモンが憎々しげに相手を睨みつける。対してバルチャモンはその視線を鼻で笑った。

「どうせ使えんだらうと思ってここで張っておいて正解だったぜ。まさかエージェントごと連れてきやがるとはな」

「待ち伏せの先陣か！」

「砂に紛れての潜伏……奴のホームグラウンドに誘い込まれてしまいましたか」

どうやらこのバルチャモンはアザゼルの一員らしい。砂塵の死神の異名に相応しく、砂舞う荒野でエイト達を待ち伏せしていたのだ。

エイトとアイベロスも警戒体制をとる。スパロウモンが叫び返した。

「約束通り、リアル人間は連れて来ただろ！ オレの仲間を返せ！」

「はあ？ 仲間？」

「ソウダ！ 人間を連れてこれバ、オレの仲間は解放するって約束だったロ！」

必死に主張するスパロウモン。しかしバルチャモンはにやにやとした冷笑を返した。

「あア？ そんな約束したっけなあ？」

「な、なんだト！」

スパロウモンが気色ばむ。黒の鳥人は不気味に笑うとCND・96を構え直す。

「知らねえなあ、そんな奴ら。ああ、そうそう。ちよつと前、綺麗な羽が欲しいとかいう人間の依頼が来てたなあ。そのあとゴミを何個かコートブロックに捨てた気がするぜ」

「なっ……！ お前達、まさか！」

コートブロック。それはガベージデータの流れてく埋立地として有名なブロックだ。つまり、もうスパロウモンの仲間達は……！

「カカカカ！ 第一、何で狙撃が専門分野の俺がわざわざお前達の前に姿を現したと思っう？ 事情を知る奴を確実に始末して、そのリアル人を手に入れるためさあ！ 運が良ければお友達に会えるだろうさ！ くだばんな！ リーパーストライク！」

バルチャモンは最初から約束を守るつもりなど全くなかったのだ。ここに居るのは成功しようがしまいがスパロウモンを始末して赤子を手に入れるためだったのである。

顔から色を失ったスパロウモンへ向けて、哄笑したバルチャモンは発砲した。

「うあああ！」

敵の急所を正確に突くというその凶弾はスパロウモンの右翼を狙う。仲間の行方に気を取られて油断したスパロウモンは右翼に弾が貫通して苦鳴を上げ、バランスを崩して墜落した。低高度だったのが幸いして、スパロウモンが下敷きになりエイトとアイベロス、赤子に怪我はなかったが、逆にショックに備える時間もなく落下の衝撃に呻く羽目になる。

「ぐ……」

「うええええん！」

「スパロウモン……！ くっ……！」

スパロウモンは虫の息で気を失っている。アイベロスの腕の中で赤子が恐怖に泣きわめいた。このままでは全滅だ。エイトは瞬時に判断する。

「光学迷彩シールド、作成！」

完全体のデジモンが相手では長く持たないと分かっている、時間稼ぎのために咄嗟にEPを使って盾を作成し、展開する。

「本当に今日は大赤字だよ！」

その直後、墜落の際に巻き上がった砂塵の間からこちらを狙撃してきたバルチャモンの砲弾が盾を直撃した。あまりの威力に盾がひしゃげる。

「チッ！ しぶとい野郎だぜ！」

こちらを仕留め損ったバルチャモンが舌打ちした。

12

時間がない。

エイトはアイベロスから泣きじゃくる赤子を受け取ると、迷いなく胸のバッジをデジヴァイスに突き刺した。

「完全体進化プラグイン、バージョンMAILERDAEMON、ナンバー22！ アン

ティラモン、起動！」

「承認しました」

「アア？ そうか、お前タイマーか！ ケッ！ 道理で戦い慣れてる訳だ！」

バルチャモンから矢継ぎ早に放たれる銃弾が盾を完全に吹き飛ばした瞬間、なんとかアイベロスの進化が間に合う。

「トウルイエモン、進化……！ アンティラモン……！」

「あうあうあ！」

進化フィールドの光に驚いた赤子が不思議そうにアイベロスに手を伸ばす。

お気に入りの大きな兎のおもちやがもつと大きな兎のおもちやになってしまったとでも思っているのだろうか。

「だめ。……いい子、してて」

進化したアイベロスは寡黙な中にも小さき者を愛でる性格へと変貌する。言葉少なにそつと赤子を静止すると、バルチャモン目掛けて荒野を蹴った。距離を詰めようとするアイベロスを砂の弾丸が掠めていくが、彼は巧みな体捌きでこれを避けていく。

そしてついにバルチャモンの頭上に躍り出ると宝斧を振りかぶった。

「アシパトラヴァナ……！」

「ハアン！　しゃらくせえ！　デザートデスサイズ！」

接近を許し、悪態をついたバルチャモンは、CND96に取り付けられた大鎌を振るって斬撃の嵐を打ち払う。

「ケエツ！　近づきやあ何とかなると思ったかあ？　俺は接近戦もイケんだよお！」

「む……」

恐るべき臂力でアイベロスと武器をぶつけ合うその姿は、デザートイーグルならぬデザートコンドル。しかも、相手は同じ完全体とはいえウイルス種だ。アイベロスは力で押され気味になる。

「ホラよお！」

バルチャモンは一際大きく鎌を振るってアイベロスを弾き飛ばすと、自らの足元へライフルを発砲した。カートリッジ代わりの砂時計がくると半回転した途端、着弾した地面が凄まじい量の砂嵐を巻き起こした。

「く……」

視界と呼吸を妨害されアイベロスが顔を庇ったその時。

「アイベロス！　足を止めるな！」

「リーパーストライク！」

「うっ……！」

エイトの発した警告は一步間に合わなかった。砂塵の向こう側から飛来した砂の銃弾がアイベロスの左肩を撃ち抜く。撃ち抜かれたテクスチャとフレームが宙を舞った。

「アイベロス！」

「ホラホラホラあ！」

「くっ」

エイトが名を呼ぶ中、アイベロスは肩を抑えながらも追い討ちの二の弾、三の弾に気づいて何とか小刻みな跳躍で躲した。しかしそのせいでバルチャモンとの距離が再び開いてしまう。こうなってしまうえば銃弾のサンドバッグだ。アイベロスは必死に弾丸の雨を躲していく。しかし、砂によって悪くなった視界に阻まれ、襲いくる弾にじわじわと傷を負われ始めた。

まずい。

エイトの心に焦りが生まれた。

近接攻撃が主力でデータ種のアイベロスと、遠近両方をこなし、ウイルス種、更には拔群の視力を持ち砂塵を味方につけるバルチャモンとは相性が最悪だ。どうにかして自分がフォローして相手を攪乱しなければ。

だが、恐らく自分が不意を衝けるのは一度だけだ。今はアイベロスに集中して見逃してもらえているが、自分がちよっかいを出して失敗すれば間違いなく一瞬にして撃ち抜かれてしまう。それでも。

「あうあ、えあう」

「大丈夫、ちゃんと送り届けるよ」

腕のなかのぬくみにエイトは微笑みかける。

笑う。

滅多に動かさない表情筋でへたくそな笑顔を作った。それでも。

「えへへへええ」

「……笑った」

エイトの変な笑顔がおかしかったのか、この危機的状況で赤子は笑った。途端にエイトのデジブレインの動きがすつと軽くなる。

守らなきゃ。アイベロスも、この子も！

決意を固めたエイトはデジヴァイスを掲げた。

相棒は必ず応えてくれると信じて。

「視覚聴覚保護シールド、作成！ アイベロス、合わせろ！」

「ああん？」

「……マスター」

その叫びの後、エイトと赤子、そしてアイベロスの周りに薄いシールドが展開される。気づいて顔を上げたアイベロスと、怪訝そうなバルチャモンが突然怒声を上げたエイトに注目した。

「XM84、作成！ これでも、喰らえ！」

きゅぼ、という音と共に、エイトの手からピンを抜いたスチール缶が放たれた。

次の瞬間、百八十デシベルの爆発音、そして百万カンデラを超える閃光が場に炸裂した。

「ぐぎゃあああああつ!?」

XM84。兵器名スタングレネード。

ジェット機のエンジンが間近で動作したと同レベルの大音量と、大型スタジアムの照明を目の前で焚かれたようなまばゆい光を何の保護もなく浴びたバルチャモンは、聴力と自慢の目を焼かれて悲鳴を上げる。

そこへアイベロスが襲いかかった。この一撃で奴を仕留めんと宝斧を振りかぶる。

「獲<sup>と</sup>った！」

エイトはそう確信した。……はずだった。

「クソがああああつ！」

本能でアイベロスの接近に気づいたバルチャモンが咆哮する。彼は怒ったコンドルのように顔を真っ赤に染め、なりふり構わず出鱈目な方向へと銃口を向けた。

「ウィザーウィング！」

「何!？」

突如、CND 96の砂時計が高速回転する。同時に膨大な量の砂が銃口から溢れ出た。それは自律するコンドルの大群となつて、今まさに腕を振り下ろそうとしていたアイベロスへと群がった。

「くあ……！」

「アイベロス！」

死肉を啄む怪鳥めいた大量の嘴の襲撃を食らい、アイベロスは悲鳴を上げて吹き飛ばされ、負傷して地に叩きつけられた。ダメージを負い過ぎトゥルイエモンまで退化する。

「この……！ 人間ごときが！ よくも……！ よくも俺の目を！」

「マスター！」

視界を遮られてなお、反撃能力を残していたバルチャモンは、激昂するとコンドルの大群を次にはエイトと赤子へと差し向ける。最早丸腰のエイトにこれを退ける術はない。こちらの決死の反撃は一步及ばなかった。

駄目だ。逃げられない。

アイベロスが悲痛な叫びを上げる中、エイトは覚悟を決めて赤子を抱き込んだ。

「せめて、君は生きて……！」

目を閉じてそう祈つた瞬間だった。

「守れ、アト、ルネ、ポル！ ……シュベルトガイスト！」

それはまるでモーセが海を割つたが如く。

赤く輝く六つの光、そして三つの白い剣線がエイト達を庇うように砂のコンドル達を防ぎきり、カウンターで切り払つた。

「何だあ!？」

「な、何が……？」

バルチャモンが驚愕し、エイトは目を開いてその様を呆気に取られて見つめた。

首の皮は繋がっているし、胴に穴も開いていない。

自分達は助かつたらしい。

だが、一体何が起きているのか。

ぼかんとする彼に向け、威厳と慈愛に満ち溢れた声がかけられた。

「よく持ち堪えた、人間」

「誰だ、テメエ！」

視力が回復してきたバルチャモンが険を増して威嚇する。

「誰……？」

声の方を仰ぎ見たエイトは、自分と敵の間に背を向けて立ち塞がる白い騎士の姿を認めた。圧倒的なデータ質量。そこにいるだけで壁のような圧迫感を覚える。それでいて、清廉な、高潔な空気があたかも泥中の蓮の如く砂嵐を払う。

赤い三つのオーラを待らせ、白い竜骨じみた鎧の骨格に金の瞳。胸には青いクリスタ

ル。両手、長い尾の刃。そして赤いボロボロのマントを羽織ったその者は告げた。

「我が名はジエスモン。ロイヤルナイトが一騎」

天は自ら助るものを助く。神の福音は舞い降りた。

13

「ろっ……ロイヤルナイトだとお!？」

ジエスモン。

そう名乗った騎士の正体にバルチャモンは狼狽する。

「ロイヤルナイト……？ 何故、こんなところに……」

アイベロスがよろよろと体を起こしながら呟いた。

ロイヤルナイト。

それは、イグドラシルによって選ばれたデジタルワールドのセキュリティの最高峰を担う、十三体の聖騎士型デジモンの称号だ。究極体を中心に選出されており、対処する事象の規模の大きさから、人間の都市部はおろか、デジタルワールドの中でも滅多と姿を現すことのない存在である。

ジエスモンはデータ型の究極体。デジタルワールド各地に起こる異変や混沌の兆しを感じる能力を備え、どのロイヤルナイトよりもいち早く駆けつけるといふ聖騎士である。アイベロスの言う通り、こんな人間の街の近郊をうろついているような存在ではなかった。

各々の困惑した視線を受け止め、ジエスモンは口を開いた。

「アザゼル。君達はやり過ぎた」

「やり過ぎただと？」

やや焦燥感が湧いた口調でバルチャモンが食ってかかる。

ジエスモンはエイトの足元に倒れているスパロウモンにちらりと視線をやった。

「デジモンの密猟。人間とデジモンの間で取り決めた古き盟約……。それを根底から破壊する行為、私が感知したからには看過できない」

「古き盟約……？」

アスモデウスから聞き及んだ言葉がジエスモンの口から放たれ、エイトは目を見開く。

「その子は盟約の柱。リアルワールドでなすべき使命を持つ福音の子」

「この子が……？」

エイトは腕の中の赤子を思わず凝視した。

リアルワールドでなすべき使命？ 福音の子？ こんな無力な者が？ それにしたって

ジエスモンの言い方は非常に仰々しい。

彼は声音を低くして威圧的にバルチャモンに問いかけた。

「アザゼルよ、一つ問う。Dの正体を知っているか？」

「俺が聞いてえよクソが！　こんな割に合わねえ！　来い、コンドルども！」

一方、ジエスマンの降臨で完全に不利を悟ったバルチャモンは、そう言い捨てること再び大量の砂を巻き上げた。砂のコンドル達はエイト達に向かうことなく厚い砂のカーテンを作り始める。

砂に紛れて逃亡するつもりなのだ。

「……逃がさない。アト、ルネ、ポル。皆を守れ」

それを見たジエスマンが動く。

まず、自身の従える三つのオーラにエイトと赤子、アイベロス、そしてスパロウモンを守るよう命じる。赤い龍頭のようなオーラ達はたちどころにエイト達を取り巻いて防御を固め始めた。

ジエスマン自身は空を蹴って、迷彩マントを被って砂がくれしようとしていた黒い鳥人に一瞬のうちに肉薄する。その風圧で砂嵐に穴が開いた。

「ひい……！」

あまりの能力差に慄いてひきつれた悲鳴を上げるバルチャモンに、白い竜騎士は無慈悲に刃を振るつた。

「裁きを受けよ。……轍剣」

両手の刃が目にも止まらぬ斬撃の嵐を見舞う。ライフルを真つ二つに折り、赤い翼を引き裂き、頭蓋を断ち割り、肩当てを砕き――。

「あああああ！」

「成敗！」

とどめの一撃が断末魔の声を轟かせるバルチャモンを袈裟斬りに打ち倒した。その瞬間、黒の鳥人の姿は光になって消え、冥府へ向け飛び去っていった。

エイト達を苦しめ、スパロウモンの仲間の命を弄んだ砂塵の死神の最後だった。

「すごい……」

これがデジタルワールドの守護を司るロイヤルナイトの力。一瞬にしてひっくり返された戦況にエイトはただただ目を見張るばかりだった。

その声にジエスマンが振り向く。

金の鋭い瞳と視線が合ってエイトはついびくりと体を強ばらせた。

それを見たジエスマンが剣の構えを解く。

「大丈夫？　怖がらせてごめんね」

「えっ」

「怪我はないかい？　今治療するからね」

突然その口から放たれた気さくな、少年じみた柔和な声音にエイトは目を点にした。先ほどまでの厳粛な空気は吹き飛び、一気に親しみやすさが現れる。

「あ、あのう……」

「あ、ごめんね。これ、びっくりするよね。僕、ロイヤルナイツの中で一番若いからさ。悪い奴と戦う時は威厳を保つようになってお師匠様達に言われて……本当はこんな口調なんだ」

そう言っただけ照れ臭そうにする騎士は、とてもではないが名誉ある存在には見えなかった。

14

「大丈夫？ アイベロス」

「はい。ジエスモンのおかげで全快いたしました。助けくださってありがとうございます存じます」

「どういたしまして」

あれからまず、ジエスモンはエイト達に怪我の治療を行なってくれた。彼の持つ治癒の能力によってアイベロスの傷は癒され、スパロウモンの翼も修復された。しかし、スパロウモンは仲間を失ったショックから未だ目覚めないうままだ。

「スパロウモンの身柄は僕が預かるよ。僕はこのままアザゼルを追うからさ」

そう告げるジエスモンにエイトは疑問を投げかける。

「あの……ジエスモンは、どうしてアザゼルを？」

命を助けられたことには重々感謝しているのだが、本来なら一生巡り会えそうもない存在に出会ったことがエイトの中で大きな衝撃をもたらしていた。

聖騎士はその問いに迷いなく答える。

「僕の任務は、デジタルワールドと人間勢力の均衡が崩れそうになる兆しを発見、問題があれば解決することなんだ」

「デジタルワールドと、人間の均衡？ 人デジ安保条約違反のことですか？」

エイトはスパロウモンから聞かされたアザゼルの罪を思い出す。

「そう。今回は人間側から密猟グループが現れたことでデジモンに犠牲者が出てしまった。このままこの軌轢が大きくなれば、いずれデジモンと人間との関係性が悪化し、大規模な争いに発展する可能性があったんだ。火種は早い目に消すに越したことはないからね。アザゼルは上位レベルのデジモン達が多く所属していると聞く。それを扇動しているのがDだと調べがついた。だから……」

「ロイヤルナイツである貴方が取り締まりに来たんですね」

ジエスモンの答えにエイトはやつと納得がいく。と、同時に申し訳なきが立った。

「申し訳ありません、ジエスモン。僕達もDについてはよく知らなくて。それに、僕達人間がご迷惑を……」

Dというブローカーについて、エイト達は全く情報を持っていない。バルチャモンも同じようであった。

到底自分の責任でどうこうなるような事態ではないが、エイトは謝らずにはいられなかった。それでもジエスモンは泰山のように堂々と笑って首を振る。

「気にしなくていいよ。人間みんながみんな、アザゼルみたいだなんて思っただけだよ。長い間二つの種族が共存を続けていけば、こういう事は度々起こる。それを解決するのが僕達の役目だから」

しかし彼は一転口調を曇らせて赤子を見やる。

「……だけど、まさか盟約の子にまで手を出しているなんて」

「あの、この子って一体何者なんですか？ 一体この子は、リアルワールドで何をさせられるんですか？」

ジエスモンから赤子についての言葉が出たことにエイトは食いつく。

ロイヤルナイツが知るほどの赤子の使命。

まだ何もできないこの子が一体何をさせられるというのか、エイトは心配でたまらなかつたのだ。しかし、ジエスモンは不思議そうに問い返してきた。

「おや？ 君の上司のDAEMONに聞いていないのかい？」

「はい。この子をリアルワールドに送り返して、どうしてリアル人間がそこに住んでいるのか、話を聞いてこいとだけ」

「ふうん、そうか……」

エイトの答えを聞いてジエスモンはほんの少し黙考すると、結論を出してうなずいた。

「なら、僕が余計な事を教えるより、直接見てきた方がいいかもしれないね」

「えっ？」

きよとんとするエイトに白の竜騎士は笑いかける。

「僕のお師匠様もよく言うんだ。考えるな、感じる。って。だから君の上司も、きつと君自身の目と耳で聞いて、真実を確かめて欲しいんだと思うよ」

「はあ……」

人間よりも人間臭いことを言い出すロイヤルナイツにエイトはぼんやりと生返事を返すしかなかった。

「一つだけ、僕から言えるとするなら、この子はこの星すべての者から祝福されるべき存在だっただけかな」

「この星、すべてから……」

ジエスモンの言葉にエイトは再び赤子に視線を落とす。

その心がおもむろにつつ闇のような羨望に囚われる。

やはり、この子は特別なんだ。望まれて生まれてきた子。

なんとなく生まれ、なんとなく生きていく僕達なんかより、ずっと。

そう考えた時、それを見透かすかのようにジエスモンが告げた。

「けれどね、本当はそれは誰だって同じなんだよ」

「えっ？」

エイトは続く言葉で顔を上げた。心の中を覗かれたようで。

「デジモンも、君もね。全ての命は誰かに祝福されるために、ここにある」

「ジエスモン……」

「現に君と君のパートナーも、スパロウモンも、誰かを守ろうとしただろう？ 結果的に、君達が粘ってくれたからこうして僕が間に合った」

それは導きの言葉だった。ロイヤルナイトは優しい色を乗せて金の瞳を煌めかせる。

この赤子も、エイトも、アイベロスもみんな、等しく祝福されるべきという。

「君の無事を一番祝福してくれているのは、彼だろ？」

「……アイベロス」

ジエスモンの視線を追ったエイトはそこに顔を曇らせたアイベロスを見つけた。

「力及ばず、申し訳ございません、マスター」

アイベロスが視線を下げる。

そうだ。エイトは彼を残して死んでしまうところだった。

そうなってしまうえばアイベロスはどうなってしまっただろう。

進化プラグインが効果を失って退化し、バルチャモンに確実に仕留められてしまったのだらう。そう思い至った瞬間エイトのデジブレインに非常に不快な感覚が走った。

ずっと一緒にいたはずの存在が目の前でいなくなる。

死んだら、僕はいつかりソースをリヴァースに回収されて、別の「誰か」になる。

そうなればもうアイベロスの好物が何かも思い出せないし、横を通り過ぎても気づかない。繋がりは絶たれる。

それは頭をかきむしりたくなるくらいの不快感——恐怖だった。

彼はそれをアイベロスに味合わせかけてしまったのだ。

「ううん、いいんだ。君こそ、無事でよかった」

「マスター……」

それがエイトの心からの言葉だった。

アイベロスが視線を上げる。お互いが相手の無事を噛み締め、じつと見つめ合った。

そんな二人にジエスモンがなおも語りかける。

「みんな、誰かが必要としている。この子もそうだってだけなんだよ。ただ、それを忘れてしまった時、アザゼルのような奴らが現れるんだ」

「……」

「どうか忘れないでくれ。みんな生きている。それは、君たちも同じだということ」

聖騎士はそう言って明星のような目を細めた。

瞳だけの微笑みは穏やかにエイトの心に沁みていく。

エイトは先ほどまで考えていた。デジタルより、リアルの方が「価値がある」と。自分達リヴァースの人間は幻のようなものだ。

見かけはころころと変えられるし、確固という自我はデジブレインにあるこの人格だけである。だからこそ、肉のあるこの赤子に尊さを感じていた。

でもそれは、アザゼルと同じ思考だったのだ。

エイトにはアイベロスがいる。

特別な存在が。

生まれてすぐに出会い、共に戦い、働き、食事し、たわいもないことを話し合う。

それがリヴァースの当たり前。

例えリヴァースの人間を人間たらしめるものがデジブレインに宿った「誰か」という儂いデータであつたとしても、それを必要としてくれる者がいるのなら。

それでもう、十分だったのだ。

「さて、アザゼルの方は僕に任せて。君たちはこのままデジタルゲートを目指すといい」

「わかりました。ありがとうございます」

ジエスモンの申し出をエイト達はありがたく受ける。

彼はふとエイトの抱く赤子に向き直った。

「ああそうだ、せっかくの機会だから、僕からも彼に饑餓の言葉を贈っていいかい？」

「もちろんです」

この掠れた電脳世界の片隅からキリエ・エレysonを贈ろうとするロイヤルナイトの前に、エイトは赤子を持ち上げる。

突然高い高いをされて赤子はうれしそうに足をジタバタさせ、はしゃぎ声を上げた。

「あきやははは！」

「ふふ、あれだけ怖い目に遭つたのに肝が据わっている。君の将来が楽しみだね。ちよつと大人しくしておくれ」

可愛らしい仕草に空気を緩めると、ジエスモンは赤子の前に立った。

「君に、剣の祝福を。君が全ての災厄から守られんことを」

そう言つて救世主の名を冠するロイヤルナイトは尾の剣で十字を切ると、そつと赤子の肩に触れさせた。その途端、ふわりと細かなドットの光が蛍のように飛び交つた。それはまるで、遙か古の王からの叙勲、あるいは司祭の洗礼のように。

時を同じくして、上空から差し込んだ擬似太陽の光が、砂に反射してまるでスポットライトのように彼らを照らす。刃がキラキラと光を跳ね返して輝いた。

それは本当にたまたまだったのかもしれない。けれど、エイトには世界がこの洗礼を寿いでいるように思えた。息を吞んでその光景を目に焼き付ける。

「あーぶんぶう」

「おっと。触っちゃダメだよ。それじゃ、僕はもう行くよ。どうか元気で」  
ふくふくとした手が刃に触れようとするのを見たジエスモンはサツと剣を遠ざける。そして軽く笑うとスパロウモンを担いでエイト達に背を向けた。

「助けてくださって本当にありがとうございました、ジエスモン」

「それじゃあね。縁があればまた会おう」

頭を下げるエイト達にそう言い残すと、白い騎士はあつという間に空の彼方へ飛び去って行ったのだった。

15

「あれがデジタルゲート……」

ジエスモンと別れて一時間程度。

アイベロスが赤子を抱き、エイトがそれを気遣いながら歩いた。

ジエスモンの言っていた通り、その後の旅路には邪魔が入ることなく、エイト達は無事ナリタまで辿りついた。彼等のゆく先に、空まで貫く光の柱が見えてくる。

荒野のど真ん中に立つ巨大な機械のゲートフレームの中に、七色の光の幕が不規則に輝き、ドットの光と0と1の信号の欠片が周りを渦巻く。

ナリタ国際デジタルゲートだった。

「これは……全然手入れがされてないな」

国際とは名ばかりで周囲には誰もいない。久しく使われていない証拠に機械のあちこちが埃のデータにまみれ、風化が進んでいる。

「ちよつと待っていてくれ、アイベロス。アスモデウスに教えてもらった座標にアクセスを繋ぐよ」

「あーううう」

「わかひました」

赤子に顔を引き伸ばされながらアイベロスが問の抜けた返事を返す。

エイトはちよつと笑ってゲートに備え付けられていた操作盤に手を伸ばした。

「ええと……光速と時差修正。リアル時間の基本秒設定はセシウム133の原子の基底状態の二つの超微細準位の間の遷移に対応する放射の周期の9192631770倍。リアルタイムモードはノーマル除染モード。出現座標は日本、アカツキ地方、ホナミ村……」

リアルとリヴァースの時間規格は異なっている。

古の時代には地球の自転や公転周期を基にした末に、原子核が持つ普遍的な現象を利用した時間企画が一秒として用いられていたが、リヴァースでは光が真空中で一メートル進むためにかかる時間が一秒と定義されている。つまり、リヴァースにおける体感の一秒は、リアルワールドにおける約三・三四ナノ秒というわけだ。

アスモデウスが「刹那の神隠し」と言ったのはこのためだ。おそらくリアルにいる赤子の保護者は赤子が消えたことにすら気づいていない。

更にリアルの大気や土地はかつての戦いによって宇宙線を始めとした様々な放射線や毒物に晒されている。リヴァース人がリアライズするためには有機パーツであるデジブレインを守るための除染膜をテクスチャに貼らなければならない。

「ああううう」

「もう少し待っていてくれよ。あと少しで君の住んでいる所まで送り届けてあげるから」

赤子の声に急かされるようにエイトは指を動かす。作業に勤しむ彼にアイベロスが残念そうに声をかけた。

「申し訳ありません、マスター。DAEMONである私にはリアライズが許可されておりません。この先はよろしくお願いいたします」

「うん、わかってるよ」

もう少しでゲートの設定が完了する。

その瞬間だった。

突如、エイトの背中がぶわりと総毛立つ。

「デーモン、か……歯車ごときに随分な名前をつけたものだな」

次いで明確な悪意、殺意、この世の闇を全て集めたような冷たい、それでいて怒りにたぎっているような声がエイト達に叩きつけられた。

悲鳴を押し殺し、反射的に後ろを振り向く。

指先が麻痺したかのように止まり、思わず掠れた声がエイトの喉から漏れた。

「あ……あ……」

いる。

何か圧倒的な情報密度を持つ、邪悪な何かが。

バルチャモンとは比較にならない程の何かが。

空気が殺気立ち、重くのしかかる。一瞬の油断で喉を噛みちぎられるような緊張感。

生物として唯一残った脳が甲高く警告を告げている。

逃げろ、と。

それなのに肝心の体は全く機能してくれない。まるでデジブレインがエラーを起こしたかのように。

そして無意識に視線だけでキョロキョロと悪意の根源を探すエイトは見つけてしまう。

同じく赤子を抱えて身を固くしていたアイベロスの真下。擬似太陽によって生み出された影がふつふつと泡立つのを。

「アイベロス！ 下だあ！」

気づけば悲鳴に近い絶叫で相棒に注意を送っていた。

果たしてその叫びは相棒と赤子の命を救った。

「くっ……!!」

アイベロスが高く跳躍してその場を離脱した瞬間、彼の影の中から漆黒の炎が立ち上がり、それまで彼が立っていた場所を舐めるように焼き尽くしたのだ。

先ほどの声が今度は愉悦をあらわにする。

「ほう、避けたか。小賢しい」

「だっ……誰だ!」

エイトの誰何の声はみつともなく震えていた。

なげなしの勇気を振り絞って辺りを見回す。

答えはないかと思われたが、声は愉快そうに言葉を返してきた。

「ただの餌に名乗る者などおらぬ、と言いたいところだが。最初の一太刀を避けたこと、そしてその嬰兒をここまで運んできた褒美に教えてやるとしよう」

「な……!?!」

エイトが息を呑んだと同時に、少し離れた場所に伸びていたデジタルゲートの影から何かがぬるりと立ち上がる。

現れたのは絵に描いたような悪魔の司祭、という風情の人物だった。

赤い祭服に、禍々しい紋章の刻まれたカズラ。目深に被った頭巾からはぎらつく瞳と悪魔の印である二本の角が覗く。そして背には一對の翼を背負っている。

「我が名はデーモン。そう、お主の連れる紛い物ではない。我は闇を統べる者。ダークエリアの支配者……魔王ぞ」

ウイルス種、究極体、魔王型。

正しく悪魔の名を冠する、災厄のデジモンの降臨だった。

16

デジタルワールドには「ダークエリア」と呼ばれるデータの掃き溜めがある。

通常デジモン達が暮らすこのリヴァースのサーフェイスウェブではなく、隔離された別のレイヤーのダークウェブに存在している場所で、寿命を迎えたり戦いに敗れ消滅したデジモンが送られる冥府がこれにあたる。

管理者であるアヌビモンにより裁定を受け、許されたものはデジタマへ還元され、そうでないものはそのままダークエリアに封じ込められる。

罪を犯した者や、魔に魅入られた者、墮天した者、光から見放されたありとあらゆる悪鬼魔獣が跳梁跋扈する地だ。

その最下層エリア「コキュートス」にはアヌビモンすらも手が出せぬ、悪魔・暗黒系の頂点に立つ七体の魔王型デジモンが巢食う。

リヴァースの人間側にも接触禁忌対象として周知されている彼等。

七つの大罪に準えられた称号。それは――。

「七大魔王……憤怒の、デーモン……」

「いかにも」

震える唇でエイトが絞り出した称号に対し、悪魔は鷹揚にうなずいた。

「そんな……どうして？　ダークエリア最下層にいるはずの七大魔王が……！」

アイベロスが固い声で問う。

デーモンは元々は天使型であったが、墮天したことによって生きながらダークエリアへと封ぜられた存在である。本来ならばジエスモンと並んでこのような場所で邂逅することなどないはずの禁忌中の禁忌の相手なのだ。

狼狽えるエイト達の様子を楽しむかのように、デーモンはくつくつと笑った。

「知れたことよ。より強大なる力を入れ、デジタルワールドに復讐を遂げるためぞ」

「より強大な力……？」

眉根を寄せるエイトに対し、これ以上の会話は無意味と言わんばかりにデーモンが手を突き出す。

「問答は終わりなり。その嬰兒を渡せ」

「こ、この子に何をするつもりだ！　一体全体、何で皆してこの子を狙うんだ！」

「ふ、ふええええん！」

場の異様な雰囲気と、血相を変えたエイトの怒鳴り声に怯えた赤子がとうとう泣き始める。デーモンは煩わしそうに視線をくれる。

「耳障りな」

そしてアイベロスと赤子に向かって腕を一閃させた。途端にローブの中から青白い腕が伸び、鞭のようになってアイベロスを襲った。

「アイベロス！」

「くう……！」

赤子を守りながらアイベロスが必死にそれを躲そうとする。だが、その速度は敵とは比べものにならないかった。

「うっ！」

「アイベロス！」

「ぎゃああああん！」

飛び退ろうとした足首をデーモンに掴まれたアイベロスはそのまま地面に叩きつけられる。赤子を庇ったために受け身も満足にとれず、痛みに呻いた。

その衝撃に驚いた赤子が更に酷く泣き喚く。

エイトは半ば恐怖で意識が遠のきそうになりながらも特殊進化プラグインのバッジを握った。

「完全体進化プラグイン、バージョンMAILER・DAEMON、ナンバー22！　アン

テイラモン……起動！」

「……！ 承認しました！」

エイトはわかっていた。

相手はウイルス種。更には究極体で魔王の名を冠するデジモンである。特殊進化プラグインを使用してもデータ種のアンティラモンでは到底太刀打ちはできない。戦力差は絶望的だ。それでも体は生を求めてもがいていた。

「トウルイエモン、進化……！ アンティラモン……」

「無駄な抵抗を」

進化の光に弾かれて、デーモンが手を元へと戻す。

アンティラモンへと進化したアイベロスがそつとエイトに赤子を託した。

「アイベロス……」

「頼みます、マスター」

その声は死地におもむく戦士のそれであった。エイトは思わず息を呑む。対するデーモンは向かってくるアイベロスに片手をかざした。

「まずは紛い物から消し炭にしてくれよう。フレイムインフェルノ！」

途端に片手の前に凄まじい熱量の炎球が現れ、蛇を模した火炎が地を走ってアイベロスに襲いかかる。

炎の地獄。

そう名付けられた技の熱量で地面が溶け、焼け焦げた線が跡を引いた。

「この炎に浄化されれば輪廻の苦しみから解脱できようぞ」

「アイベロス！」

「……くっ」

受けることもままならぬ高熱、更にはデーモンの言葉通り、この猛炎によって命を奪われれば転生のためのデータ片すら焼き焦がされる。アイベロスは避けるのが精一杯だ。

「アシパトラヴァアナ……！」

避けきれぬ炎は宝斧で旋風を起こすことでなんとか撃退する。

「児戯なり」

しかし、悪魔の王は慈悲も残さない。アイベロスを挟み撃ちにする形で背中側から炎が迫った。

「ぐっ！」

辺りに肉が焦げる嫌な匂いが立ち込める。

咄嗟に打ち払おうとした左手の宝斧が猛火によってデータを焼かれ、斧状態を解除されて素手に戻ってしまったのだ。怯んだアイベロスに更に炎が襲い掛かった。

「ああ……！」

このままじゃ相棒が丸焼きにされてしまう。

だが、エイトの目にとある光景が目に入った。  
それは赤黒く弾ける放電の光。  
あまりの高温の炎が空气中で高速移動を行うことに伴うプラズマ化。  
陽イオンと電子の分離。  
更に、デーモンの衣服が自らの放つ炎の熱でほんのりと溶け始めていること。  
「そうか……！ それなら！」  
死中に活を求めるエイトは咄嗟にデジヴァイスをかざしていた。

17

「急速範囲凍結！ Zip Plasma.zip Ayperos/Fire-」

彼が叫んだ瞬間、デジヴァイスがメール転送エージェントにのみ許されたとあるプログラムを実行する。

刹那、空気がパンパンに詰まった密閉ボトルを捻り上げたような音が響いた。アイベロスを飲み込むはずだった炎が、透明な膜のようなプログラムに阻まれる。  
膜にぶつかった衝撃で0と1で彩られた火の粉が散った。

「何!？」

デーモンが初めて軽い驚きをあらわにする。

フレイムインフェルノが膜に触れる端から、魔法のように掻き消されているのだ。

「これは……!」

アイベロスが自分を守る見えない盾に目を見張る。

「まだまた!」

エイトが仕掛けたのはプラズマの急速再結合。

おむつを凍結する時に使ったあの「荷物を範囲凍結する」プログラムを利用して、プラズマ化していた炎の陽イオンと電子を急速凍結、即席のプラズマインターセプターを作り出すことで火炎を弾いたのだ！

そして彼は次の手に移る。

「重力キャンセラー反転！ Gravity\_Canceler -100% Demon/clothes-」

「むおっ!」

その瞬間、デーモンが無様に地面へと這いつくばった。

まるで手足を地面に縫い止められるかのように。

「貴様……!」

悪魔の王はその屈辱に憤怒を見せる。

「今だあ！ アイベロス!」

エイトは千載一遇のチャンスをもものにすべく、絶叫した。

彼がやったのは何か。

エイトは先ほどデーモンの衣服が自分の技で溶けているを目撃した。それはつまり、デーモンが着ている衣服はデーモンの所有する「デジモンとしての構成データ」なのではなく、「ただの被服オブジェクト」だということを意味していた。

故に、その衣服に対して、貨物運搬用の重力キャンセラーをフルパワーで反転実行させた。つまり、超高威力の重力攻撃を加えたのである。

デーモン自身には通らずとも、ただの「荷物」たる衣服ならば。

結果、瞬間的に莫大な疑似重力負荷を受けたデーモンは地面に四つん這いに手足を突き、断頭台で刑の執行を待つ大罪人のように頭を垂れたのだ。

「はああああっ！」

エイトが作り出した隙を無駄にせんとアイベロスが残った宝斧を振りかぶる。

そして裂帛の気合いと共にデーモンの首めがけて打ち下ろした。  
しかし。

「……！」

「な、何で？」

甲高い音を立てて、宝斧は止まった。

デーモンの首に刃を立てたまま。

「攻撃が……通らない……！」

アイベロスが必死に宝斧に力を込める。

それでも、デーモンの皮膚は冗談のように傷一つつかなかった。

圧倒的な進化レベルの差。

エイト達はそれを覆すことができなかつたのだ。

「もう終わりか？」

「う……！」

その言葉が地面にひびきまづいたデーモンの口から放たれた瞬間、エイトの背にぞつとした怖気が走る。思わず小さな悲鳴が漏れた。

自分達の全力も、これほどの補助プログラムを使っても、奴には届かない。

桁違いの力。

まさに、悪魔<sup>デーモン</sup>。

「……褒めてつかわそう」

「う、あ……！」

恐怖に慄くエイト達を嘲笑うかのように、魔王は重力に逆らってゆつくりとその身を起こし始めた。

「この我に、膝を付かせたということを」

「くっ……！」

アイベロスの宝斧が万力のような力で押し返され始め、デジヴァイスの中で、重力キャンセルのプログラムが対象物の重量オーバーを告げている。

デーモンに跳ね返されているのだ。

そしてついに。

《EPの残高が5%を切りました。セーフモードへ移行します。現在実行中のタスクは終了いたします》

「しまったっ！」

それは絶望の宣告だった。

今日一日、エイトはEPによって繰り返し高価な武装や補助プログラムを作成した。

そのツケがとうとうこのタイミングでやってきてしまったのだ。

デジヴァイスに自動設定されていたEPの節約モードが発動してしまい、重力キャンセルはその役目を終えた。

それは魔王が重力の支配から解放されたことを意味していた。

「だが、所詮は浅知恵……！」

「アイベロス！」

立ち上がったデーモンは飛び退ろうとするアイベロスの頭を素早く鷲掴む。

「我が力の前には全て矮小なり！」

「アイベロスー!!」

エイトの悲鳴が響く中、アイベロスは頭から勢いよくデジタルゲートの操作盤に叩きつけられた。操作盤からは破片が飛び散り、軽く火花が散る。

「……………」

アイベロスは衝撃でトゥルイエモンまで退化すると、力無くデーモンの手の中にぶら下げられた。

「終わりぞ」

悪魔はそんなアイベロスをゴミでも放るようにエイト達の前に打ち捨てたのだった。

18

「アイベロス！ アイベロス!! 大丈夫か!？」

「うええええん！」

「何、とか」

赤子が泣きじゃくる中、エイトはアイベロスに駆け寄った。

彼はひどくふらつきながらも立ち上がる。

「これが、究極体の中でも頂点に立つ程の……力」

「愚かなり。紛い物の進化しかできぬお主らに傷など付けようもない」

「紛い物の、進化だって？」

エイトは特殊進化プラグインのバッジを握り込んだ。  
自らの名譽の証。

叙勲された時の誇らしい気持ち。アイベロスとの戦いの記憶。

腐葉土のように二人で均してきた経験を、力尽くで偽物と一蹴された気がした。

デーモンは愚問と言わんばかりに息巻く。

「現にお主らは補助なくば進化も、完全体すらへも到達できまい！ 文明の極みへと達したと表するが、その実お主等は生物として袋小路へと自らを追い込んだに過ぎぬ！ 生物は栄華盛衰……それが星の真理よ！ 見かけのテクスチャこそ違えどお主ら人間など押し並べて我等よりも臚であり虚ぞ！ それはもはや生物としての終いよ！ 何故生物として正しいはずの我等が進化を止めた黄昏の種族と共存せねばならぬ!? 世界を存続させ続けるためには、不要なりソースは排除せねばならぬのだ！ 生物としての淘汰……当たり前前の事ぞ！」

「それが、お前がダークエリアへ落された理由か！」

「いかにも。生物として全きなる正しきを執行しようとした我を、天使どもはコキュートスへと落とした！ 全くの正義であった我を！ 許せぬ。決して許せぬ！ 過ちは正されねばならぬ。故に我は力を持ってこの世界を正すのだ！」

エイトは戦慄と共にデーモンの本質を理解する。

この七大魔王は元は力を持った高位の天使であった。それがダークエリアへと封ぜられた理由。それは正しさに固執し過ぎたに他ならない。

苛烈なる正義を求める余り、他者を踏み躪る選択をした。そして墮天してもなお、その天使としての本質は損なわれることなく、正しさを信じ続けている。

理解せぬ他者に地獄の憤怒を抱きながら。

しかし、エイトは一つどうしても解せぬことがあった。

「それが何故、この子の命を狙うことに繋がるんだ！」

デーモンは業火を口から吹き散らしながら答える。

「お主達リヴァースの人間は、遠き過去にデジモンを究極体へと進化させるほどの情念——未来への渴望を失った！ だがリアルな人間は違う。リアルな人間が生まれたばかりの頃の無垢なる感情値は、我々デジモンに無限の可能性を与えるのだ。そう……究極体を遥かに超える、超究極体へと進化を促す程の莫大な力ぞ！」

「何だつて!？」

「その嬰兒を喰らわば我はより強大な力を手にすることができる！ わざわざ愚かなる人間に接触してリアルから盗ませた甲斐があったというものよ！」

「じゃあ、アザゼルは……!？」

「奴らはよき駒として働いてくれたものだ。お陰で忌々しきロイヤルナイトはそちらに引

き付けられ無駄骨を折り、こうして我が手に贅が転がり込んでできてくれたのだからな！  
褒美に人間と子ども、跡形も無く喰らうてやったわ！ カス程の容量、腹の足しにもなら  
なかつたがな」

「それじゃあ……！」

謎のブローカー、DとはデーモンのD。

エイトの脳裏にシブヤで会った女の顔が浮かぶ。

彼女は、今頃……！

「全ては我が掌の上よ！ 恐れよ、絶望せよ、そして諦めよ！ 歩みを止めたリヴァース  
の人間よ！」

「……！」

この事態は仕組まれていた。他ならぬ目の前の魔王によって。

それは残虐なまでの悪意の肯定、そしてエイトの生への否定だった。

エイトの感情が思考の泥濘に囚われる。

もう駄目だ。

デジブレインはそう予測している。

それでもだ。

エイトは唇を噛み締めた。手はみつともなく震えているし、足だつて笑っている。

おかしいな、と彼は独りごちる。

自分はいさつきまで、生きることここまですべて執着してなんていなかった。

リヴァース人らしく、大海に漂う水母くらげのように淡泊な感性のまま、相手の言うことは正  
しいと思つてしまつただらう。圧倒的な力に振じ伏せられ、自分の可能性の限界を突きつ  
けられて。

どうせいつかはリヴァースの歯車に還り、また生まれる。だから今の自分を保存するこ  
とになんて、そこまでしがみつくことはなかつたはずだ。

けれど今ならば分かる。デーモンは間違つている。

あの一言が。

ジエスモンの一言が確実にエイトを変えた。

全ての命は誰かに祝福されて生きている。

聖騎士との出会い、赤子の身の上、そして、アイベロスとの思い出。

死んだら、僕が僕である証明は全てなくなつてしまう。

それはなんて、もつたいない。

守るにはどうすればいいんだ。

——戦うしかないじゃないか。

エイトの胸の内に強い願望が生まれた。

生き残るためには戦うしかない。

だつて荷物を目的地まで無事に届けるのが僕達メール転送エージェントだから！  
ここまで来て諦めるなんてまっぴら御免だった。

もう都合よく味方が現れたりはいしない。

この世界の神は自分達を見捨てたのかもしれない。

それでも、神が自分達を見捨てたのなら、

「僕等を助けられるのは……僕等だけだから！」

エイトは赤子を抱く手でデジヴァイスを握りしめた。もう手は震えていなかった。

逆の手でアイベロスの手を握る。

「アイベロス！」

「……！」

ぼろぼろの相棒がはつと顔を上げる。

「悪い！ 僕は諦められない！ 君自身を守るためにも——僕と最期まで生きて、そして死んでくれ!!」

エイトの魂を揺るがすような絶叫に、アイベロスは答えた。

「ええ、マスター」

エイトが彼と出会ってから初めて目にする満面の笑顔を浮かべて。

19

「叶わぬとわかっていながら抵抗するつもりか？ げに人間とは愚かよ」

魔王はエイトを睥睨し、呆れたように吐き捨てた。

エイトはもうその鋭い眼光にも怯まない。腹に力を込めて言い返した。

「愚かだつていいさ！ それに……そんなに腹が減っているなら、まずは前菜にこれでも食らいなよ！」

矢庭、エイトはデジヴァイスに封じ込めていたとあるデータをデーモンめがけて投げつけた。

「解凍！ おむつ.zip！ そして……」

「むう!？」

その瞬間、凄まじい爆発がデーモンに襲いかかった。

Annonium Nitrate Fuel Oil explosive——通称アンホ爆薬。

硝酸アンモニウムと燃料油からなる爆薬だ。

エイトがデーモンへ浴びせたのは二つのプログラム。

一つは、おむつの排泄物に含まれた尿素を微生物データに分解させてアンモニアを生成、硝酸と合成して硝酸アンモニウムを作り出すプログラムだった。そして、その硝酸アンモニウムとデーモンが繰り出す火炎と油がごくごく小規模かつ威力の高い爆発を誘発す

るように仕向けていたのだ。

「小癩なァ！」

爆発の勢いでデーモンの衣服が燃え上がる。激昂した悪魔は灰と化したそれを破り捨て、煙を掻き避けた。旧約聖書に著される悪魔の如く、筋骨隆々とした赤黒い体毛に青白い肌と左右非対称の巨大な鉤爪、そして鋭い牙があらわになる。

見るものを畏怖させる異形。しかし、それこそがエイトの狙いであった。

「アイベロス！ 突っ込め！」

「はい！」

兎角鉄爪を構えたアイベロスが煙を掻い潜ってデーモンに突撃する。

「無駄だと言っているのが分からぬか！」

実力差を理解し切っている悪魔は改めて力の差を示すつもりなのか、この反撃を正々堂々と打ち払おうと鉤爪を横薙ぎに振るった。

煙が爪の形に引き裂かれる。

「忍迅拳！」

素早いステップを踏んでフェイントをかけながら繰り出された渾身の一撃と、デーモンの鉤爪が衝突し、鏝迫り合いを起こした。

圧倒的不利のステータスでは一瞬にして勝敗がつくと思われたそれは。

「何っ!？」

デーモンの声に動揺が混じった。

ぼろり。

突如としてそう形容できそうなほど容易く、兎角鉄爪が触れている部分のデーモンの皮膚が爛れ、ひび割れ始めたのだ。

「やった！」

「貴様……何をしたア!？」

エイトが歓喜の声を上げ、デーモンが激昂する。そのまま腕を大きく払い、アイベロスを弾き飛ばした。しかし、アイベロスは今度はしっかりと跳躍して飛び退り、エイト達の前に着地する。それでも蓄積した疲れから片膝をついた。

彼の背中を後ろから支えながらエイトは悪魔へ嫌味を言う。

「そんなに偉そうなのにはわからないのか？ 兎の登り坂ってやつさ！」

エイトが仕掛けたもう一つのプログラム。

それは「デジモンを安全に退化させる」プログラムだった。

通常アイベロスが「完全体から成熟期へと退化する」際を利用する補助プログラムの一種。それをアンホ爆弾に仕込んで煙と共にデーモンへ浴びせたのだ。

このプログラムは元々アイベロス用だから今のアイベロスには効果がない。

更に、究極体であるデーモンへは直接の退化の効果は期待できない。しかし、退化を促

進する効果はそのテクスチャの結合を弱め、なおかつプログラムの適応者であるアイベロスを受容することによって「アイベロスの攻撃だけがテクスチャを貫通する」ように仕組んだのだ。

アイベロスとエイトが寸暇を惜しんで努力し、共に戦ってきたからこそその証。ティマーであるエイトだからこそ所持していたプログラム。文字通りの反撃の狼煙。

わずかに残ったEPの残量で結実させた、最後の抵抗だった。

「何故諦めぬ！ ただの歯車にリアルサル一匹、いつ命尽きようともこの世界は変わらぬ！ 貴様らが勝てる可能性なぞ方に一つもあり得ぬ！」

爛れた皮膚を憎々しげに見下ろしながらデーモンはエイト達を威嚇する。

エイト達の状況は依然劣勢だ。

刃は通るようになったとは言え、相手の強大な力は健在である。

それでも反抗の口火を切ったのはアイベロスだった。

「当たり前です……諦めたら、今を生きている私達は、消えてしまう」

エイトも続いて啖呵を切る。

「……どうせいつかは死ぬんなら、お前の理論だと、今一瞬を足掻いた方がお得だろ」

「得、だと？」

せせこましい単語に眉根を寄せる魔王に向かい、アイベロスは最後の力を掻き集めてゆつくりと立ち上がる。その姿にデーモンはわずかに焦燥を感じた。

おかしい。いつもならばこのような脆弱なはずのデータ種の成熟期は一瞬にして捻り潰せるはずなのだ。それなのに、此奴等ときたらどうだ。このしぶときはどこから現れる？

魔王の視線の先のアイベロスは今一度戦いの構えを取った。

「私はマスターを守ります。燃え尽きるまで……」

「方に一つがあり得ないなら、兆に一つの可能性で書き換えるッ！ それで、ティマーだ！ 僕達は……絶対」

『諦めない！』

あと一撃。

最期まで、共に。

そう誓い合って、エイトが再び赤子を抱く腕に特殊進化プラグインを握ったその瞬間であつた。

「あうううあああ！」

二人の間に挟まれていた赤子が一際高く啼泣した。

それに応えるように、眩い光が赤子から十字の形を模して照らされる。

ちようどジエスモンが祝福を与えた肩から。

「ぐおおおお!? 何だこれはアア!? 体が焼ける！」

その光を浴びて、デーモンが醜い呻き声を上げた。  
悪魔の体からぶすぶすと煙が立ち上る。

まるでダークエリアに浸された汚れを剥ぎ取られるかのように。  
それは聖騎士の戯れ。

その場の誰も知ることのない事実。

ジエスモンの持つ「アウスジェネリクス」——自己の書き換え能力のほんの一端。彼はアト、ルネ、ポルよりも更に小さなオーラの欠片をおまじないとして赤子に施した。剣の祝福。

「自己を書き換えて環境に適応する」力を持ったその欠片は、赤子の生存本能に反応してほんのわずか、一分の「1 parts per trillion」だけリヴァースの事象の確率の書き換えに手を貸して、役目を終えて燃え尽きた。

「これは……!?!」

瞠目するエイトとアイベロスが溢れんばかりの真白の光に包まれる。その発生源は赤子と呼応するかのように輝くエイトの特殊進化プラグインのバッジだった。

「プラグインが……」

エイトは驚愕しながらバッジを見下ろした。

その目の前で封筒のマークをしていたバッジが形を変え、四つの顔と四つの翼を持つ天使のレリーフへと生まれ変わる。最後に焼き印を押すように光で文字が刻まれた。

“ULTIMATE Ver. ANGEL No.2 cherubimon”と。

「一体、何が……」

信じられない思いでプラグインを見つめるエイトだが、アイベロスにデジヴァイスごと手を握られて顔を上げた。

「マスター……」

「えええええん！」

手の温もりと赤子の力強い哭声がこれは現実だと告げる。

「……うん！」

我に返ったエイトは静かにうなずき返した。

今はこの奇跡に賭けるしかない。

人類史よりも遙か昔から続く、ひどく野生的で、最も純粹な祈り。

中身がスカスカだろうと、デジモンよりも生物らしくなろうとも。

「生きて何が悪い！」

今ならば描ける気がした。歩みを止めたはずのリヴァースに住む生命。

その進化の先を！

今、ここに繋がる三人の心が一つになった。

エイトは進化プラグインをデジヴァイスへと突き刺す。

レリーフに刻まれた文字を叫んだ。

「究極進化プラグイン、バージョンANGEL、ナンバー2！ ケルビモン……起動！」

「承認！ トウルイエモン究極進化……！」  
アイベロスの咆哮が響いた瞬間、デジヴァイスから一際強い光が氾濫し、彼の姿が進化フィールドに取り込まれる。

その身体は桃色の大きい獣へと変じる。手は救いを求める者へと差し伸べられるように慈悲深く開かれ、日輪のような形の付け襟を纏う。両耳は翼のように広がり、神聖なる者の力の証であるホーリーリングが戴かれた。

彼の者は名乗りを上げる。

「ケルビモン！」

智天使の名を冠するワクチン種、究極体。

上位三体「父」たる三大天使の一角であり、第二位。究極の善。

デジタルワールド中のデータが演算されているとされる中核カーネルの守護者。

この世で最も至純なる者——赤子の、生への渴望という最も原始的にして純粋な願いがジエスモンの祝福をトリガーに、今デジタルワールドの奥深くに眠っていた無垢なる天使の進化プラグインを再起動させ、エイトとアイベロスの決意に共鳴してこの場へと降臨させたのだ。

長らく空座であったデジタルワールドにて二番目に高位な天使の御姿を。

20

「馬鹿な……！ ケルビモン、か!？」

アイベロスは穏やかな瞳で驚愕する悪魔を見つめた。

「悲しいね。かつてあなたとの戦いで僕は命を落とした。第一位の座についていたはずのあなたと、対峙する時がまた戦場だなんて」

「戯言を！ その命と引き換えに我を追放したのはお主であろう！」

二体の究極体デジモンが向かい合う。

方やリヴァースを追われ地の底から宿怨に身を浸す煉獄の魔王。

方や長い時をおいてリヴァースに降臨した無垢なる天使。

彼らは互いに既知であったらしい。

「アイベロス……」

エイトは別人格のようになったアイベロスの名を惚けたように呟いた。

今やアイベロスにはケルビモンの記憶が再現レプリカされている。まるで元のアイベロスがいなくなってしまうかのようで心配になったのだ。

「大丈夫、マスター」

声だけがアイベロスのままだった。彼は柔らかい声音で心配するエイトに微笑みかける。その呼び名が、彼がエイトのことを覚えていると伝えてくれた。

「……うん」

エイトはほつと息を吐いた。

アイベロスは再びデーモンへ向き直ると、静謐な中にも凜とした声で告げた。

「デーモン。……もう止めよう。見ての通り、リヴァースの人間はあなたが失望するほど未来への歩みを、進化を止めたわけじゃない。リアルの人間達も、諦めてなんかいないんだよ。……だからこうやって命を繋いでいる。かつて天使だったあなたなら知っているはずだ。大人しくダークエリアへ帰ってくれないか？」

対して憤怒の魔王は燃え盛る憎悪を抑えきれぬように鉤爪を握る。

「何を……！ 人間なぞこの世界の苔のようなものぞ！ 長く居座っては害しかもたらさぬ！ 我はこの世界を正しく導くためにをそれを拭い去るのだ！」

「導くべき存在を全て滅ぼして、一体何が残るといふんだい？ あなたが滅ぼそうとしているのは、かつてあなたが一番守りたかつた者達じゃないか！」

アイベロスの説得にも魔王は耳を貸そうとはしない。

口が裂けんばかりに叫び返す。

「世迷言をほごくな！ 我が守りを裏切ったのはその墮落者共よ！ 我が怒りが潰える時は、この身が減ぶか、この世界が減ぶかの二つに一つ！」

「……そう」

その答えでアイベロスは悟った。静かに目を閉じながら断じる。

「最早、あなたの正義は誰かのための正義ではなくて……あなただけの正義になってしまったんだね」

「何イ……？」

二体のやりとりをエイトは息を潜めて見守る。

赤子はいつの間にか泣き止んでいた。

アイベロスはゆっくりと目を開く。

そこには優しさの中にも厳しい決意の光が宿っていた。

「ならばその蛮行、見過ごすわけにはいかない」

そう宣告し、アイベロスは天空に右手をかざす。

たちどころにその掌に雷が収束した。

アイベロスがそれを握ると雷電は稲妻型の槍のように細長く収まる。

彼はデーモンへとそれを突きつけ、宣言した。

「三大天使の第二位として、ここであなたを討つ！」

「埃を被っていた獣如きが、力を蓄え続けた我に今更敵うと思うてか！ 今一度冥府に送ってくれようぞ！」

対する七大魔王の一角は両手に黒々とした業火をまとわせる。

ぎらつく目でアイベロスを睨み返した。

智天使対魔王。

生の守護者と死への案内人の闘争。

最後の戦いが始まるうとしていた。

21

両者が動いたのは同時だった。

「魂まで燃え落ちよ！ フレイムインフェルノ！」

「魂まで神解けせよ！ ライトニングスピア！」

デーモンが武火を、アイベロスが雷霆を放つ。

網のように広がった稲妻と炎が五角の力で対消滅し、衝撃波を巻き起こした。

「くっ……！」

エイトは自分の背を盾にしてその爆風から赤子を庇う。

その衝突を皮切りにデーモンとアイベロスは炎と雷を操って接近戦を繰り広げ始めた。

雷の槍が悪魔の胸を幾度となく狙い、炎の鉤爪に弾かれる。その頭上から爆炎が甚雨のように天使に降り注ぎ、いなく雷光が雪崩を打ってこれを退けた。金と黒の飛び散る煙を縫って暗紫の拳が桜色の頭蓋目掛けて振り下ろされる。だが、柔手の掌がこれを受け止めた。力が拮抗し、二体は両手を合わせて組み合う形で睨み合う。

先に口を開いたのはデーモンだった。

「分からぬ……！ 何故そこまでの力がありながら下民の僕に甘んじる……！」

アイベロスも譲らない。

「僕なんかじゃない……！ 出会いは用意されていたものだとしても、今はただ一緒にいたいから一緒にいる！ それだけのことさ！」

そして両者は互いの掌から放たれた炎と雷を噴射する勢いで距離を取り、再び猛炎と迅雷の角逐を始めた。

「獣風情が！ 力の扱ひも未熟な分際で甘言を垂れるな！」

「くっ……！」

ケルビモンとして目覚めたばかりのアイベロスは、いかに強大なワクチン種としての力を持つとも、未だその振るい方に慣れていない。劣勢とまではいかないが、デーモンの言う通りやや押され気味になっていた。

時折炎が彼の体を掠め、うつすらと傷を負い始める。

「アイベロス……！」

エイトは手に汗を握りながらそれを見守ることしかできない。

とうとう不利を悟ったアイベロスはエイトへと退避を促した。

「リアルへ行つて、マスター！　ここは僕が食い止める！」

「そんな……！」

エイトは絶句する。

リヴァースへアイベロスを残し、赤子を連れてリアルへと逃げろというのか。

「そんなこと、できないよ！」

ただちに拒否するエイトにアイベロスは尚も言い募る。

「ここには危険だ！　リアルへ行つてしまえば彼も容易く追いかけられない！　デジタルゲートは七大魔王程の巨大データ容量を持つ接触禁忌対象者は拒絶されるようになっている！　自分でその子を拐えなかったのはそれが理由なんだ！」

「余計なことを……！」

デーモンが苛立つ。どうやらアイベロスが言うことは本当らしい。

ならば、最善の策はエイト達がリアルへ逃げることなのか。

では、アイベロスはどうなる？

自分でできることは、もうないのか。

EPは底をついた。もう祈ることしかできないのか。

打開策を求めて視線を彷徨わせるエイトの視界にふと飛び込んで来たのはデジタルゲートの操作盤だった。

その瞬間、焦燥に染まっていた彼の表情がみるみる引き締まる。

彼は粉塵が飛び散る中、赤子を抱え、がくがくと震える足に鞭打ってデジタルゲートの

操作盤まで這い寄った。

戦いで傷ついた操作盤の損傷具合を確認する。

「大丈夫……これなら、いける！」

操作盤のディスプレイに向かうエイトを先に気取ったのは魔王だった。

「共を見捨てるつもりか!?　卑劣なことよ！」

はつと気づいてエイトが振り返った時には火炎が目前まで迫っていた。

「うあああ！」

咄嗟に赤子を抱き込み、目を閉じて体を強張らせた。が、予測した熱と痛みはいつまで経つても訪れない。縮こまる彼に穏やかな声かけられる。

「いい。それでいいんだ、マスター」

「アイベロス……！」

こじ開けたエイトの目に飛び込んできたのは、彼と赤子を庇い、火炎の盾になったアイベロスの姿だった。致命傷ではないものの、胴に一撃を受けたらしくその皮膚からはじりじりと煙が上がっている。

更には追い討ちとばかりに業火が押し寄せてきた。アイベロスは雷で膜を張って防壁

を作る。そして火炎に耐えながらエイトを急かした。

「さあ、僕がここを守る！ 早く！ 行ってマスター！」

「生き恥を晒すか、人間！」

相棒は傷つきながらも自分達を逃そうとしている。

黒炎の向こうにはこの世のものとも思えぬ形相の悪魔がかつと口を開いている。

エイトは覚悟を決めた。

彼は素早く身を翻すと操作盤に取り付く。

「あ！ あ！ だーうう」

「大人しくしていて……！」

そして赤子に邪魔されないように抑えながら高速で操作盤に指を躍らせ始めた。

やがて、その操作に合わせデジタルゲートが低く唸りを上げ、光が渦巻き始めた。

転送準備が始まったのだ。

「おのれえ！ 逃げるな！」

デーモンが口惜しそうに咆哮する。

しかし。

「僕は、逃げない」

返ってきたのはエイトの嶮嶮げんげいのような声だった。

「逃げるのは、僕じゃないよ」

「マスター？」

アイベロスが怪訝そうに問い返す。

エイトの心は不思議と凧いでいた。

その指が最後のコマンドを入力し終える。

「転移座標、変更なし。時差修正なし！ 転移対象……デーモン！ 転送開始！」

「何!？」

エイトのオペレーションが響いた瞬間、二つの世界を股に掛ける程の有無を言わせぬ力が魔王の身に降りかかった。

「ぐ、ぬおおお、お、お……お?!」

その身体が通信障害中の動画のようになりがちり、と固まり冗談のように遅々とした動きへと変わった。次には、人形のようになったその身からドットのような光が溢れ出し、デジタルゲートの中の光と反発し、ばちばちと青白い火花を上げ始めたのだ！

「今だッ！ アイベロス！」

エイトがアイベロスを呼ぶ。

彼の最後の抵抗。

それは、デジタルゲートに「時差修正なし」で「デーモンを」転送させることだった。アイベロスの話によれば、デーモンはデジタルゲートに転送を依頼リクエストしてもセキュリティ

で拒絶<sup>リジェクト</sup>される。エイトは更に転送リクエストの際の時差修正を「なし」にすることで、リアルワールドとリヴァースの間の膨大な時間差によって生まれる処理待ち<sup>レスポンスタイム</sup>時間を作り出し、「レスポンスタイムの間だけデーモンがデジタルゲートからリジェクトされ続け、拘束される」という状況を作り出したのだ。

もう逃げないという決死の覚悟が生み出した、逆転の一手だった。

アイベロスはそれを逃さない。

天使は両手を天空に掲げた。全身全霊を以って彼の最大の力を呼び覚ます。

「来たれ、裁きの雷……！」

巨大な雷雲が瞬く間に集まった。

「お、おの、おの、れ……！」

侮蔑しきっていた対象によって拘束され、血を吐かんばかりの怒りにまみれる悪魔に向け、その審判は振り下ろされた。

「ヘブンズ・ジャッジメント！」

「おおおおお！」

轟音を立て、天空から万雷が降り注ぐ。それは一発たりとも過<sup>あやま</sup>たずデーモンを刺し貫いた。禍々しい両翼が、毒毒しい鉤爪が、鋼のような肉体が浄化の雷によって分解されていく。ついにはその上半身だけが、エイトを睨んで断末魔を口にした。

「おおお……我が、我が倒されるだど!? ……そうか。智天使に適合する程の智慧……貴様があの時、ケルビモンと共にいた人間の――！」

「だから言っただろう。リヴァースの人間も進化していると。あの時はダークエリアへの追放が精一杯だった。けれど、あなたは自分が最も悔ったものに滅ぼされるんだ」

魔王と天使が交わした最後の会話は二体の間でしか聞こえない。

「おお、口惜しや……！」

その言葉を残し、憤怒を司る七大魔王は最後まで憤りながら崩れ去ったのだった。

「アイベロス！」

「マスター」

アイベロスの元に赤子を抱いたエイトが駆け寄ってくる。

一人と一体は手を伸ばした。

『ありがとう』

言いたいことは互いにたくさんあった。

けれど、今二人の間に必要なのは、この言葉と固い包容だけだった。

「これで設定は直したよ。大丈夫、さつきはゲートに無茶させちゃったけど、一応動くは

「ずだよ」

デーモンを討ち滅ぼしてからしばらく。

エイト達はようやく赤子をリアルワールドへと送る手続きに再着手していた。元凶であるデーモンは滅ぼしたものの、グズグズしては何が起こるか分からない。

まずはアスモデウスへDの顛末を報告するメールを送り、ちょうどエイトがデジタルゲートの点検を終えたところだ。

彼は一つ汗を拭うと、赤子を抱いたアイベロスを振り返る。

赤子は恐怖が去った反動、そしてアイベロスの暖かさと彼のまとう神聖な空気が心地よいか、またすやすやと眠りの世界へと旅立っていた。

「それにしても、アイベロス……そのまま疲れないのかい？」

「怪我は治療したし、問題ないよ。ケルビモンの進化プラグインに一度適合してしまえば、逆に容易く退化ができないんだ。今まで不在だった分の処理がたくさんあるから。天使のお勤めは大変みたいだ」

「……そう」

長年空座だった三大天使の一角が復活したことで、アイベロスには様々な権限が急速に付与されたらしい。こうしている裏でもその権能によってデジタルワールドの高位の天使として新たに備わった知覚の分析で忙しいのだという。

エイトは口数の増えた相棒を面映おもほゆそうに見つめた。

「立派になったね」

「君のおかげさ。……でも、僕は君のアイベロスだよ」

共に過ごした記憶は変わらない。

言外にそう含ませてアイベロスは人懐っこい笑顔を浮かべる。その黒々とした丸い瞳がトウルイエモンだった頃の名残を残していた。

「さて、僕は尚更リヴァースからは出られなくなった。マスター、この子を頼むよ」

「うん」

エイトはアイベロスから赤子を受け取る。

人生初めてのリアライズだ。

少しの不安とわくわくとした胸の弾みがゲートに向かう足を軽くした。

「それじゃ、ちよつと行ってくる。帰りはシブヤ駅の総合ポータルに直接情報転写デジタルライズするか、君も先に戻っていいよ」

「わかった。……いつてらっしゃい、マスター。かわいい赤ちゃん、君の未来に幸多からんことを」

最後にアイベロスが赤子の頬にやさしくキスをする。

「ロイヤルナイツと三大天使から祝福をもらうなんて君くらいだろうね」

冗談めかした彼に見送られてエイトはデジタルゲートを潜った。

すぐに身体が酔ったような感覚に囚われ、エイトの姿はゲートの向こうに光となって消えて行った。

操作盤に浮かんだ文字に誰も気づくことなく。

```
《エラーメッセージT01 11100110 10011001 10000010 11101001 10010110  
10010011 11100101 10110111 10101110 11100100 10111111 10101110 11100110  
10101101 10100011 11100011 10000001 10101110 11100101 10100100 10110001  
11100110 10010101 10010111》
```

23

「眩しい……」

視界が開いたその先は、じめじめした森の中だった。

森の中、とは判断したもの、都会っ子のエイトは資料でしか森を見たことがない。

鬱蒼と生い茂る木々の隙間から漏れてくる日差しにエイトは目を細めた。

どこからかジー、ジーと大量のシーク音のような合唱が聞こえる。

「気温32・5度、湿度65%。放射線のカットは正常。ここが、リアルワールド……」

目鼻のセンサーは湿った土の匂い、樹木の匂い、そして古びた木材と苔むした石道を捉える。ゲートを振り返ってみると、それは赤い塗料で塗った柱が門のように組み立てられて構成されていた。その中央には「電子門」と書かれた額がかけられてある。転送の光は既に収まっていた。

ゲートの向こうには小さな建築物があり、その前に向かい合わせの犬の像が安置されていた。

「ここは、確か日本のアカツキ地方、ホナミ村だったよね。君の家って何処なんだろう？」

ゲートを抜けたは良いけれど、さっぱり手がかりがない場所に出してしまったエイトは半ば途方に暮れながら辺りを見回した。どう首を巡らせてみてもこのゲートの周囲には家らしき物がない。

ひとまずリヴァースからリアルワールドにまつわる辞書をダウンロードしていたその時だ。

「あんれえ。よそん人かねえ？」

「えっ！」

背後から声をかけられてエイトはびっくりと肩を浮かせた。

若い女性の声がゲートの向こうの建築物の陰から投げかけられたのだ。

勢いよく振り返った彼の目に飛び込んできたのは簡素な半袖シャツとズボンに身を包

み、手から水の入った容器と柄のついた腕を下げた一人の女性の姿だった。

その腕からぽたりと水滴が滴っている。どうやら何処かで水を撒いていたらしい。女性は気さくに話しかけてくる。

「子供けえ。ぼく、お参りに来なすつただかねえ？」

「え？ あ、あの」

リアルワールドで初めて遭遇する人間にエイトはドギマギと返事をする。

相手があまりにも不用心、というか、ラフだったので度肝を抜かれたのだ。

エイトは、リアルワールドは汚染された危険地帯で、そこに住んでいる人間達はさぞかし除染機能のゴテゴテついた重装備で生活していると思ひ込んでいた。

ところが目の前の女性はどうだ。肌は剥き出しだし、マスクの一つもしていない。

警戒してバリアを張りまくっているエイトの方が滑稽な程だ。

挙動不審な彼に女性は首を傾げるが、ふとエイトの腕の中の赤ん坊に気づくと相好を崩した。それはリヴァースの人間には真似できない程の、夏菊のような表情だった。

「あらあ、永人<sup>えいと</sup>。お兄ちゃんに抱っこしてもらってたの？ えかったねえ」

「えっ!？」

独特のイントネーションで紡がれた日華のように暖かな言葉にエイトは目を白黒させる。自分の名を呼ばれたからだ。

けれどおかしい。「お兄ちゃんに抱っこしてもらってた」ということは。

「この子……エイトって、言うんですか？」

「そうだよお。永遠の永に人って書いて永人っていうの」

「そう……なんですか」

エイトはそう返すのが精一杯だ。

確か昔のリアルワールドの日本人は読みと漢字を組み合わせる意味を持たせていた。

まさか赤子、永人が自分と同じ名前だとは思わなかった。

思わず言う必要もないはずのことを口走ってしまう。

「あの、僕も、エイトっていうんです」

途端に女性の顔が明るくなる。リアル人間は本当に表情豊かだった。

「あらあ。そおう！ ぼくはどんな字い書くの？」

そう問われてエイトは返答に窮する。

「あ、いえ。僕には字はありません。僕、リヴァースの人間なんで。シブヤブロックの第八エリア担当だからエイト、なんです」

エイトは覚悟を決めて自分がリヴァース人であることを告白する。

リアル人間を物のように扱っていたアザゼル達の反応からすれば、リアル人間はリヴァース人を敵視していたとしてもおかしくはない。

けれど、その杞憂は容易く裏切られた。

「ええ？ リヴァースの人？ ほしたら、ゲートから来なすつたんけえ？」  
女性の顔がまた大きく変わった。今度は驚愕の表情に。  
「リヴァースの人が来るなんて珍しわあ。ようこそ、リアルワールドへ」  
そう言つて女性は再び夏菊の笑顔を浮かべたのだった。

エイトと女性は建物——辞書によると社のその縁側に座つて会話していた。  
彼女の腕の中では永人がいとけない表情で微睡んでいる。

「そうけえ。永ちゃん、そんなことに……」

「はい、だから僕が届けに来ました」

女性は永子と名乗った。

彼女は永人の母親だという。

ややこしいので、永人のことは永ちゃんと呼ぶことにしたようだ。

「ほんにありがとうねえ、エイト君。私、ここで水撒いとして、これーつぼつちも気づかんかったよお。息子がお世話になりました」

永子には、永人は事故でゲートに吸い込まれ、リヴァースへ迷い込んでいたと説明した。何となく、彼女に永人がグロテスクな目的で連れ去られ、非常に危険な目に遭つたと話すのは憚られたからだ。

永子はこの場——神社という場所らしい。そしてデジタルゲートの周りの門は鳥居というのだそうだ——で社に永人を寝かせ、日課の掃除をしていたところ、エイトが現れたのだそうだ。アスモデウスが言っていた通り、時差のお陰で永人がいなくなったのはほんの一瞬のことという事実だけが残った。

エイトはそれでいいと思つた。彼女達の平穏な暮らしを徒に乱す必要はない。

「永ちゃん、大冒険してたんねえ。お母ちゃん、びつくりしたわあ」

慣れた手つきで優しく永人の背を叩いて眠りを守る永子は、我が子が愛おしくて仕方ない、といった様子で頬を寄せた。

「んーうーん」

「あや、起きた」

その刺激と母親の匂いに反応したのか、永人が小さな眼を開いた。

あ、また泣くのでは。

エイトはそう思つたが。

「んー、まーまあ、まあまあ」

「おつきしたんねえ、永ちゃん。よしよし」

「すごい……」

永人は永子を視界に入れるなり、すっかり安心した様子で甘えるように頭を擦り付けた。これが母親の力か。エイトは感心してしまう。

「まあま、んーんーま」

「ありや、こりやお腹空いとるねえ」

我が子を好きに甘えさせていた永子だが、ふとそう言い切る。

「えっ？ 何で分かるんですか？」

驚くエイトに対して彼女はなんてことないように笑った。

「そりやお母さんだからねえ」

彼女は永人を抱いて立ち上がる。

「そろそろお家帰ろうね。まんまにしよう」

「あ……」

親子は帰り支度を始めた。

別離の気配を感じたエイトは所在無げに彼女達を見上げる。

もう自分は当初の役割を終えたのだから、永人達が家に帰るのは当然のことだ。それでも胸に去来した切ないような気持ちや眉をハの字に押し下げた。

そんな彼に気づくと、永子はあの笑みを浮かべた。

「ああ、そうだ。エイト君、うちに来んかい？ 茶あでも飲んでいかんね？」

そこでエイトは、もう一つの目的をようやく思い出した。

「あ、あの！ 永子さんは、どうしてリアルに残っているんですか？」

「ん？」

不思議そうに首を傾げる永子にエイトは言い募る。

「僕、知りたいんです。どうして今リアルに生きている人の先祖が、リヴァースから取り残されたのか。それに、永人には特別な役割があるって」

不躰だとは思いつつ、そう切り出すエイトを永子はますます不思議そうな顔で見つめた。

「何でって……ここに家があるからよ？」

「で、でも」

あつけらかなと言いつつ放たれてエイトは口籠る。どうしてこんなところにその家があるのかが知りたいのだが。

「それに、ご先祖って言っても……私のばあちゃんくらいの頃の話だろうからねえ。私は詳しくは知らんけど、うちの母なら知ってると思うよお」

「えっ」

「ばあちゃんくらい？ だって、それは遠い昔の話のはずで……」

「そこまで思い至ったエイトはようやく自分の思い違いに気づく。時差だ。」

リヴァースとリアルワールドには膨大な時差がある。  
だから、エイトが考えるよりもずっと、リアルの間人にとって、それは近い過去に起こった出来事なのだ。  
戸惑うエイトを見かねた永子はくすりと苦笑する。  
「ん、それなら尚更うちにおいで。今なら母が昼休憩で戻つとるからね」  
そう言つて彼女は永人を抱き直したのだった。

25

「空が……青い」

「当たり前さねえ」

相変わらずのシーク音が鳴り響く中、エイトは永子に連れられて畑が広大に広がる道を集落まで歩いた。彼は彼女が永人を片手抱きするのが危なっかしくて見ていられず、代わりに水やり道具――バケツと柄杓をぶら下げている。

「植物も……育つてる」

「こりやうちの田んぼだよお。米育ててんだあ」

この畑は田んぼ、というらしく、米の原料となる稲が植えられているのだという。田んぼは地表面だけでなく、天空にまで浮島のように人工プレートが敷き詰められ、太陽光が余すことなく利用されている。もうすぐ刈り入れの時期だという田んぼには稲穂がみっしりと揺れ、天空から地平へ続く黄金の穂波のようだった。

畦道と呼ばれる田んぼの道の先にはもつと太い砂利道が広がっていて、その遠くに鼠色の瓦屋根の平家が生垣だけを境にして何軒か集合して建っているのが見える。

更にその向こうには入道雲と青空が広がっていた。

どれもこれも、エイトには信じがたい光景だった。

一ナノ秒毎に視神経に叩き込まれる十万ルクスの色彩の氾濫。

風速一メートルで流れてくる度数五十の分子の匂い。

リヴァースにいる時の方が単位時間に遥か多くの情報を受け取っているはずなのに、エイトはリアルの方が処理しきれない程の物を受け取っているような気がした。

何で、こんなに空気が澄んでいるんだ？

更に、生物が何の保護もなく暮らしている。

と、前を行く永子が思い出したように口を開いた。

「そういえば……永ちゃんに特別な役割があるつて言うたね？」

「あ、はい」

永子が首を傾げ、後頭部の髪が重力に引かれてさらさら靡いたのが見えた。  
大袈裟に首を傾げるのが彼女の癖らしい。

「うーん、別に普通の赤ん坊だよお」

その答えにエイトは面食らった。  
話が違う。

だってジエスモンはこの子を特別視していた。

「で、でも、リヴァースのロイヤルナイツがこの子は祝福された子だって……」

そうするとようやく永子が思い当たる節があったのか歩きながらこちらを振り向いた。

「ロイヤルナイツ？　もしかして、お祀りのこと言うてるんじゃないだろうか？」

「オマツリ？」

デジブレインの中の辞書を検索すると、複数の意味がヒットする。

その中のどの意味なのかエイトにはわからない。

「うん。私達はねー」

永子が続けようとした時だ。

「おけーり！　遅かったねー！　昼できとるでんよー！」

「で、DAEMON!？」

エイト達はいつのまにか、集落の入口まで到達していた。

その一番手前の家の庭先には、何羽かの鶏と、辞書に記載のない大型の生物が何匹かウロウロしていた。その向こうの縁側から、見たこともないくらい顔中が皺くちゃでシミだらけの、腰の曲がった女性が永子を呼んでいる。

老いたヒト型。DAEMONの証。

エイトのデジブレインのパルスが嫌な音を立てた。

「泥門？　違うよお。あれがうちの母だよ」

「ええ！」

おつとりと否定する永子の隣に見慣れぬ若者の姿を認め、老婦人はやはり大声で彼らを呼ばわった。

「あんれー？　どこの子さ？」

「ばーちゃん、ちよつとこの子に茶あ出してお話ししてやってくんね？　永ちゃんがリヴァースに迷い込んで世話になったんやて！　ばーちゃんの話き聞きたいんだと。

私永ちゃんのまんまの時間だからさあ！」

「リヴァースに迷い込んだあ？」

「あ、あの……僕、口で飲食できません……」

無駄に大声で会話する二人と置いてきぼりのエイト。

ぶら下げたバケツを無意識に指でいじくる彼に向け老婦人は手招きをする。

「あーらあ、そんじゃあんたはリヴァースの子かいな。そんなとこ突っ立つとらんとこつちさ来！」

「は、はい」

「よう来なすった。永人が世話になったそうであ。あんがとねえ」

ばーちゃん、と呼ばれた老婦人の笑顔は前歯がほとんどなかったために、逆にエイトにとつては畏怖の対象だったということはデジブレインにしまっておく。

「それじゃエイト君、ゆつくりしてつてね」

勝手知つたる我が家とばかりにさっさと家の奥に引つ込んでしまった永子親子を不安げに見送り、エイトはばーちゃんの側に近寄つた。鶏がこけこけ鳴いて迷惑そうに逃げていく。

ばーちゃんは縁側に正座したままにこことエイトを眺め回した。

「リヴァースの子ならリアルな茶も飲めねえべ？　ばーちゃんに何かお礼できることあつたけんねえ？　話さ聞きてえつて？」

「あの、昔の話聞かせてもらえませんか？」

「昔の話い？」

やはり友好的なばーちゃんの圧に気圧されながらもエイトはおずおずと切り出した。

彼にとつて老いたる者はみな敬うべきD A E M O Nであるのが常識だったので、どうにも袴かみしもを脱ぐというわけにはいかない。

「僕、知りたいんです。どうしてあなたの先祖がかつてこのリアルに残つたのか。リヴァースではもう一部の者しか知らなくて。その人達に、直接聞いてこいつて言われたんです」

そうエイトが告げた途端、ばーちゃんの笑顔が懐かしむような、それでいて困つたような複雑な色に変わった。それはまるで、枯れ木にしがみついていた枯れ葉がもう一度色づいたかのような表情だった。

「……そうけ。今のリヴァースでは、もう忘れられとるんね」

「え？」

首を傾げるエイトの前で、ばーちゃんは縁側に置いてあつたつつかけに足を下ろす。

「ええよ。ついといで。来たばつつかで悪いけど、見せたいもんがあるんよ」

そう言つてばーちゃんは腰を上げた。

26

エイトとばーちゃんは先程歩いてきた道を遡り、神社まで戻つた。

ばーちゃんは更に神社の境内の奥を抜けて、再びどこかへ続く畦道を歩き始めた。

ぼつぼつと家と田畑が並び、どこまでも同じような光景が続いているように見える。

しかし、そこで生活する人間や動物はやはりみな無防備なまま。おおよそ西暦二千年代くらいの牧歌的な農村の風景だった。

二人はその道をゆつくり歩いた。その間もエイトは次々と辞書に載っていない事象を見

つけてはばーちゃんに問いかけた。

「ずっと気になっていたんですけど、このシーク音、何ですか？」

「飼育音？」

「じーじー、っていう音です」

「そりゃ年中蟬だあ。虫の声さね」

「虫の声なんですか!? あっ、あの動物は知っています。パンダですよね」

「牛さね」

「あの丸坊主の像は？」

「お地藏さんだあ」

「うわっ！ 蛇型の毒霧!？」

「虫除けの線香」

「変なの……アイベロスに送ってやろう」

「エイトは面白いと思つた物の写真を撮ると、逐一相棒に送ってやった。

リアルにいる時の方がリヴァースにいる時よりも遙かに早い速度で「おもしろいね」や

「素敵だね」と返事が返ってきて、逆転の現象に驚きを感じる。

やがて、畦道は終わって辺り一面は背の高い植物の畑一色になった。

トウモロコシ、というらしい。

この畑のおかげで砂利道の先の見通しが悪く、エイトはどこへ向かっているのかさっぱりわからない。

次第に道が急勾配になり、行手には丘らしき地平が見えてきた。道はそこで終わっている。最後の坂道を登りながらばーちゃんがぼつりと呟いた。

「この丘の向こうに、あんたが知りたがってる物の答えがあるよ」

「答え……」

つまり、見ればわかるものなのか。

一体それは何なのか、検討もつかないまま。つまりは何の心構えもしないまま、エイトは丘のてっぺんまでたどり着いた。

そして眼下を見下ろして――。

「なん……ですか、これ……?」

息を呑んだ。

本当は、そこにあったものが何なのかデジブレインは理解していた。

しかし、思わずばーちゃんに詰め寄りたくなるほどに、それは広大な。

「お墓……!? 何なんですか、この数!？」

丘の上からは広々とした平地が一望できた。

しかし、その視界の端という端までぎっしりと詰まって建っていたのは、黒々とした石柱の羅列。間違いなくかつての日本式の墓――墓石だった。

顔色が真っ青なエイトを心配するでもなく、ばーちゃんは淡々と事実を告げた。

「ここはね、リアルの人間の墓であると同時に、太陽光発電の発電所なんさ」

「なー」

墓が、太陽光発電所だって!?

愕然とするエイトを他所に、ばーちゃんは広大な霊園を見つめながらポツリポツリと語り始める。

「ふむ。それも説明が必要じゃの。……あんたはリヴァースがどうやって稼働しているか知っておるかね?」

彼女の質問にエイトは今度はうなずいた。

「もちろんです。地球の人工大陸プレートに、磁気で磁束量子ビット演算を書き込んでマクロプロセッサを形成し、海洋中の水分子を利用した量子スクリーンにサイバースペースを投影しているんです」

教科書を諳んじるように、エイトは答える。

「うむ。けれど、リヴァースを運営するにあたり、その活動供給源である電力はどこから来ているのかは知っておるかね?」

「まさか……」

ここまで聞かれればエイトにもその予想はつく。

「水素発電と太陽光発電。リヴァースの電力を支えておるのは、人工大陸プレートのさらに外郭にあるリアルワールド本来の大陸プレートに敷かれた太陽光発電設備と海を利用した水素発電。ここは、その発電所の一つやけ」

「リヴァースが……リアルの人の管理する電力で……」

引き継がれた「常識」にさえ刻まれていなかった事実がエイトの言葉を奪う。

このリヴァースに生まれ、彼は意識が芽生えた瞬間から既に多くの知識を習得していた。それは先人が積み重ねては譲られてきたもの。当たり前前に享受してきた生活が、リアルワールドに住まう人間の庇護のもとに成り立っていたとは。そして、リヴァースの人間はこの真実をほぼ全ての人間が知ることなく一生を終えて行くのだ。

だが考えれば当たり前のことだ。

あれ程巨大な電子空間を維持するには莫大な電力がいる。

二の句を告げられない彼を他所に、ばーちゃんは続ける。

「私がまだ赤ん坊の頃さ。人間は地球の大地のほとんどを汚染しつくして、バラバラにしちまってねえ。住むことができなくなつて、リヴァースが造られた。そんな時にね、当時の人は、どうしてもリヴァースの維持のために、リアルに残つて電力を作り出す者を残さなきゃならんかった」

「……」

「けれど、そんなのは死刑と同じさあ。リヴァースを作る時に、大気をも取っ払っちゃまっ

たおかげで、汚染物質に加えてありとあらゆる宇宙線やら隕石やらが降るようになってしまった。そんなリアルで、人間が生き残れるはずはなかった」

「で、でも今は……」

エイトは空を仰ぐ。

ここは標高が高いのか、レイリー散乱で作られた抜けるような蒼穹の向こうに、うつすらとコズミックブルーが透けている。自身のセンサーは間違いなく窒素、酸素、二酸化炭素といった気体の存在を捉えているし、更にはばーちゃんをはじめとしたリアルの間人はみな衣服一つで外を歩き回っている。

これらは一体誰が成したというのか。

ばーちゃんは一つうなずくと言葉を続けた。

「そう。リアルの間人はゼロから全てをやり直したんさ。ちぎれた大陸を繋ぎ合わせて、大気を再生させて、わずかに住める場所を作り出して。そして、少しずつ、少しずつかつての環境を作り直しているところなんよ。……デジモン様の力を借りてねえ」

その追懐はまるで御伽噺を語るかの如くノスタルジアに満ちていた。

「デジモン、様？」

デジモンも、リアルに残っている存在がいた？

敬称をつけて呼ばれる名前の響きは、まるで大切な信仰対象を紹介するかのようだ。

そこに違和感を抱いたエイトの真上を突如として黒々とした大きな影が覆う。

「あ……!?!」

再び空を仰ぎ見た彼の目に飛び込んできたのは、視界いっぱい広がる巨大な影であった。大きい。余りにも大きい飛行物体だった。

影に目が慣れるとそれが極光で彩られた六枚の羽を持つ巨鳥であることが認識できた。

巨鳥は凄まじいスピードでエイト達の頭上を飛び去っていく。

羽ばたく度に白い光の後に七色が尾を引き、美しい弧を描く。

あたかもオーロラの肘傘雨のようであった。

巨影が完全に遠ざかったところでようやくエイトは声を絞り出した。

「な、何……!?! あれ」

放心するエイトを尻目に、ばーちゃんは飛び去る影に向けて合掌した。

それはこの光景が日常茶飯事であると言わんばかりの落ち着きぶりだ。

「ああ、ヴァロドウルモン様だねえ。婿さんが永人が帰って来たのに気付いて様子を見て降りて来なされたかね」

「どういう事ですか?!」

今度こそエイトは血相を変えてばーちゃんに詰め寄った。

ヴァロドウルモン。

それは上空四万メートルの成層圏に生息するという、天空の守護者と称される究極体、

聖鳥型デジモンのことだった。その羽毛は聖なる光「パージシャイン」を常時発しており、邪悪な思念を持つ攻撃を100%無効化してしまうと言われている。

その聖鳥が何故ここに。そして、婿さんが様子を見に来たとはどういうことだ。

答えは、影を見送るばーちゃんからもたらされた。

「あのヴァロドウルモン様の中にはね、永人の父ちゃんが眠つとるんさ」

「永人の……お父さん？」

エイトは自らの唇が震えるのを感じた。

混乱していた。

リアルの上で成り立っていた自分達の世界。

敬称をつけられ、崇められたデジモン達。

やり直しをしたというリアル。

大量の墓碑。

そして、ヴァロドウルモンの中で眠るといふ永人の父親。

思考がぐちゃぐちゃになってまとまらない。

「……話が途中になっちまったね」

顔色の悪いエイトから視線を引き剥がし、ばーちゃんは再び霊園に目をやると話を再開した。

「リヴァースとリアル。そのどちらをも存続させなければこの星の生命という生命は息絶える。それは、人間も、デジモンも同じ状況だった。だから、選択を迫られた私の母の世代とデジタルワールドは、一つの答えを出した」

エイトは息を呑んで答えを待つ。

「……それは？」

「究極体を中心とした、過酷な環境に強いデジモン様や、除染能力が非常に高い神聖系デジモン様とパートナー関係を結んどった一族を世界中から選出して、わずかに残った大地に住ませ、発電所の存続と同時に、リアルの再生を担わせることにしたんさ」

「それじゃあ……！」

「今、リアルに住んどる一族は、人間とイグドラシル様との契約によつて、自ら地上の再生を担った一族。みなそういった協力的なデジモン様と先祖から深く繋がつとる一族なんさ。デジモン様をお祀りして、そのお力でリヴァースを守り、星の修復を行う。……それが、私らに託された役目なんよ」

そう告げたばーちゃんの表情は道中で見た「お地蔵さん」のようだった。

「じゃあ、今リアルに残っている人やデジモン達は、自らの意思で、リヴァースを守つて、

この世界を作り直しているってことですか……?」

「ぼーちゃんから知らされた、リアルワールドと、リヴァースの現実。」

「エイトの心は忙しく波立っていた。」

「驚きのような、納得のような、それでいて、今ではその事実がリヴァースでは失われたつあるという憤り。ぼーちゃんが懐かしいような、困ったような顔をした理由がわかった気がした。」

「自分達は、なんてものを忘れ去っていたのだろう。」

「デーモンがリヴァース人に怒りを覚えるのも無理からぬことだったのかも知れない。」

「彼はきつと、かつて天使だった頃、リアル再生計画に関わっていたのだ。」

「だからその恩恵を忘れ去ったリヴァース人を「墮落者」と称した。」

「無知の知を手に入れたその代償は、余りにも罪深い悔恨だった。」

「それでも、ぼーちゃんは皺だらけの顔で笑う。」

「誰だつて家に帰りたい、と思うもんやろう? リヴァースはあんたらの家。それに、どれだけ時間が経とうとも、どれだけ文明が進もうとも、人間はいつか、遠い未来にリアルへの望郷を覚える……。だから、私らの母は地上に残って、帰る場所を作りたかつたんや。そして、デジモン様はその気持ちに共感してくださった」

「あ……」

「エイトには心当たりがあつた。」

「アザゼルに依頼を出した金持ち達。」

「全てを手に入れた果てに覚えたのはリアルへの懐古。」

「あれはその一歩だったのだろう。」

「過去の人間達はそれを予知していたのだ。」

「すべては、いつか帰ってくるリヴァースの同胞のために。」

「それが、アスモデウスが示唆した古の盟約の真実だったのだ。」

「しかし、エイトにはまだ一つ、大きな疑問が残っていた。」

「永人の役割と、彼の父親について。」

「あの、さっきのヴァロドウルモンに永人のお父さんが眠ってるっているのは?」

「その問いを聞いたばーちゃんはエイトを振り返る。」

「デジモン様は体を張ってこのリアルを支えてくださつとる。水を清め、大地を潤し、空を澄み渡らせ、宇宙からの脅威から私らを守ってくださいつとる。それでもまだ足りん。例えばデジモン様の力を借りたとしても、未だこのリアル環境では長生きすんのは難しい。それに、デジモン様達とて寿命はある。私は幸いにして長生きした方だけんども、たいいていの人間は四十半ばで死んじまう。だから、私達は考えた」

「そこで言葉を止めたばーちゃんは、また眼下に視線を下ろした。」

「命が尽きるその前に、恩に報い、これからも子々孫々に協力してもらうために……死期

を悟った人間は、パートナーのデジモン様に魂を祀って受け取ってもらうんよ」

「……！」

エイトはがつん、とデジブレインが殴られたかのような衝撃を受けた。

パートナーに、魂を祀る。

つまり、デジモンに精神データを預けることでそのデジモンの寿命を伸ばし、力を保ち続ける一助となるということだった。

聞こえ悪くいうならば、人柱である。

けれど、ばーちゃんはそれが栄誉であるかのように、大切な宝物を紹介するかのよう愛おしい口調で続けた。

「私は残念ながら、デジモン様の方が先に冥府へ旅立たれてしもうた。若い頃はこれでも研究者での。一緒によう穀物の復活に勤しんだもんや。けれど、永人の父ちゃんは若くして肺を患ってな。あん子が産まれてすぐ、パートナーだったヴァロドウルモン様と旅立った。そうしてデジモン様達と添い遂げた者達の墓が、これさ」

エイトはようやく、これだけの墓が広がっている理由がわかった。

これらの墓の主は、全て死期を悟ってデジモン達に魂を捧げた者達だったのだ。

肉体は滅ぼうとも、魂は滅ばない。

デジモンと共に生き続ける。

それがリアルな人間が選んだ最期の選択。

ただ一つ、この世界を守り続けるという目的の果てに。

「けれど、魂はデジモン様達と世界を飛び回つとる。あくまでこん墓は生き取った頃の記憶であって、あんまし意味はねえ。墓を作れる土地だってまだ有限だけんね。だから墓石を太陽光発電用の電池で作ることで、霊園と太陽光発電を両立させとるんよ」

それを聞いてもエイトは驚きこそすれ、不思議と嫌悪感を抱くことはなかった。

だって、自分達リヴァース人だって死んだらまた誰かのリソースになる。

リアルな人間の場合その逆で、体というリソースが減びても、人間を人間たらしめる精神データがデジモンのためのリソースになっっているに過ぎないのだ。

彼らは、ただ自分の人生を送っているだけで、リヴァースの犠牲になっているなどとは微塵も思っていない。だからこれほどまでに満ち足りているのだ。

「永人は生まれた時から随分とヴァロドウルモン様に目をかけられとつてね。ヴァロドウルモン様は、いつもは空の向こうで宇宙から飛んでくる危険物の排除を担当してらっしゃる。あの方がおられなんだら、私たちはあつという間に隕石の餌食になっちゃう。永人も大きくなったらきつと父親の跡を継いで、ヴァロドウルモン様をパートナーとしてお祀りするようになるじやろうて」

「そして、死してなお、デジモンと共に生きる……それがあなた達の生き方、なんですなね」  
「そうよお」

やつと、エイトは永人の役割を理解した。

何のことはない。ジエスモンの言った通りだった。

彼はきつとこれからこの大地で精一杯デジモンと共に生きて、死んでいく。

祀る、とはパートナー関係を築いて互いを支え合うこと。

その相棒がヴァロドウルモンという地球、ひいてはリヴァースを守るに欠かせない重要な存在だったから盟約の子と呼ばれたのだ。

しかしながらその実態は、精一杯生きて、明日を生きる誰かのために死ぬ。

リヴァースの人間となんら変わりはなかったのだ。

だからこそ、一つだけエイトの中でひっかかることがある。

「永人のお父さんが魂をデジモンに渡す時に、別れは寂しくなかつたんですか？」

「ばーちゃんは穏やかに息を吐いた。笑ったようである。」

「寂しくはないよ。パートナーのデジモン様と一つになれば、私等はどこにでも行ける。その魂は、風にも乗れるし、大地も走れる……残された私等も、デジモン様の姿を見りゃ、ああ、元気にやつとるねって安心するけえの。大切な存在と共にこの世を見そなわす八百万の神さんになるんよ」

「八百万の神？」

「ばーちゃんはずいぶん。」

「ああ。神さんはどこにでもいるんや。……あんたの中にもね。だから私らは、デジモン様をデジモン様と呼ぶんよ。私たちの神さんはデジモン様やからね」

「僕の、中にも……」

エイトはリヴァース人である。リアルの人間よりは遥かに長寿だ。

しかし、地球という星から見た彼らの寿命は全くの逆だ。

リヴァース人の寿命は文字通り光の速さで散っていく。

一方、この滅びと再生の大地に住まう者達は、その短命の運命を受け入れている。

それは、死後、自らの大切なパートナーが自らを迎えてくれる、そして自分の代わりに明日へ命を繋いでくれる存在がいるから。

リアルの間人はその行為に神性を見出している。

一度全てが壊れたこのリアルでは、森羅万象に存在する神性と魂、「情報」というおぼろの物は全て溶け合っって同じ価値。

だからこそ彼等はデジモンを敬うのだ。

エイトはやつとそれが理解できた。

すべての命は、誰かに祝福されるために。

なら、僕を祝福してくれるのは？

エイトの胸中にふとケルビモンとなったアイベロスの神々しい姿が思い出された。彼に、会いたい。

エイトの中で無性にその欲求が膨れ上がった。

幸いこれで、聞きたいことは全て聞いた。

デジヴァイスの時計を確かめるとこちらに来てから一時間程が経過している。

アスモデウスが言っていた「たまに戻らない者もいる」とは、きつとリアルの実を  
知ってリヴァースに失望した者なのだろう。

けれど、エイトには待っている者がいる。

「よく、わかりました。ありがとうございます、ばーちゃん。僕も、そろそろ、帰らなく  
ちゃ……」

最後にエイトは今一度、墓標を目に焼き付けたのだった。

28

「いろいろ、ありがとうございました、永子さん、ばーちゃん」

「すまんねえ、何もおもてなしできんでよお」

「あんなんで永人が世話になった札になりや良かったがね」  
数十分後。

これで公務を完了したエイトのステータスは次の指示待ち状態となった。

この状態ならリアルデジタルゲートからリヴァース内のファストトラベルシステム  
ポータルへ直接の転送座標指定ができる。彼は情報転写先をシブヤ駅の改札前総合ポータ  
ルに設定して、デジタルゲートを起動した。

淡く光るゲートの鳥居の前で、ばーちゃん、永人親子に最後の挨拶をする。

「あの、これからもその……」

真実を知ったことで、自分だけがリヴァースへと去ることに引け目を覚え、口をもごも  
ごさせるエイトをばーちゃんが笑い飛ばした。

全て分かっているとでもいうかのように。

「気にせんでええ。お互いがお互い、自分の生きる場所で精一杯生きりゃええ。……この  
星はそうやって回つとる」

「……はい」

その言葉はエイトの胸にすつと染みこんで笑顔にさせた。

「だーあーうー」

一方、お乳をもらい、離乳食も食べさせてもらった永人はご機嫌で永子の腕の中で足を  
バタバタさせている。エイトは笑顔のまま彼を覗き込んで声をかけた。

「永人も元気だね」

「うー」

そのぶくぶくの手と最後に握手をする。

君はリアルで。僕はデジタルの世界で生きていく。

ひとつ微笑むとエイトは彼らに背を向けた。

「それじゃ、失礼します。……転送開始！」

「元気でね」

「達者でなあ」

見送りの声は物質変換のノイズの間に消えた。

29

慣れた体の感覚と同時に始まる脳の処理に目を開けば、そこは見慣れたシブヤの駅の改札出口のはずだった。

「な、どうして？」

リヴァースに戻ってきたエイトの視界に飛び込んできたのは全く知らない街だった。

駅前にある特徴的な大スクリーンのあるビルも、熱気のこもった横断歩道も、空を渡るメール達も。それらは全て見つけることはできず、代わりに目に入るのはよくわからないネオンカラーの巨大なチューブや、突然何もない所から出現しては引っ込んでいくエアタツチスクリーン、人やデジモン達が乗り込んでは一瞬で飛び去っていく謎のカプセル、空を埋め尽くす大量のパイプなど。

それらに囲まれて立ち尽くすエイトを人々が迷惑そうに避けていく。

その人々の服装も、どこか見慣れない。

衣服にデータにない機材がついていたり、下半身が多脚車になっていたり。中には服は着ておらず、ゴツゴツした機械の体で歩いている者も。よく見るとそのほとんどが実体ですらないホログラムだ。

とうとうリヴァース人は自分で歩くことすらしなくなったのか。

唯一変わっていないのは、そのごみごみとした人いきれだけであった。

「一体、何が……？」

慌ててデジヴァイスを確認してみても、座標は間違いなくシブヤ駅を指している。

まるで、シブヤが街ごと生まれ変わったかのようなようだった。

「そんな、僕がいない間に何があったんだ……？ そうだ、アイベロス、アイベロスは!？」  
アイベロスとはここで待ち合わせをしていたはずだ。

エイトはキョロキョロと周りを見渡して軽く目を見開く。

それは、ポータルを出た先の広場のど真ん中に鎮座していた。

電子苔が張り付き、所々風化したぼろぼろの石像。

目を閉じ、直立不動で広場を見守るように建っている。

「ケルビモンの、像？」

人々が待ち合わせの目印にしているのだろう。背を預けた人々が密集しているが、誰一人として振り返りもしない。すつかり景観に溶け込んでいる。

こんなもの、シブヤのど真ん中にあつただろうか？

不思議に思つて近寄つた瞬間、更に心臓がひっくり返るような出来事が起きた。

「やあ、おかえり、マスター」

「……！」

石像がきろりと目を開いたかと思うと、動き出して気さくに語りかけてきたのだ！

「うぎゃあ！」

「うわあ!？」

像の周りにいた者達が悲鳴を上げて飛び退く。

「あー、肩凝つた」

像はそんな喧騒を気にも留めず、ぶるんぶるんと全身を震わせた。

すると、像の表面を覆っていたセメントのような層と苔が次々と吹き飛び、やがてベビーピンクと純白で彩られた神々しい姿が現れる。

後光すら漏れる、その威容。

大都会の中に突如降臨した、圧倒的な神聖さ。

それは紛れもなく、

「あ、アイベロス、なの……？」

「そうだよ」

エイトの相棒、アイベロスだった。

30

「ど、どういうこと……？ 君、何でそんな、石化してたの？」

「何でつてそりゃあずつと君をここで待つてたからね」

「ずつと待つてたつて……街も何かおかしいし、何が起こつているの？」

アイベロスの答えにエイトは眉根を寄せる。

待つと言つたつて、一時間程度のことだろう。

それが何故、街が様変わりし、アイベロスに苔が生えるんだ。

二人が会話を交わす間にも、周りの人々が口々にアイベロスを指差して何か喚く。

「動いた!？」

「あれ見て？ ケルビモン像が動いてる！」

「バカ言つてんじゃないよ。何かの撮影だろ？」

「いや、でも本物はどこなよ!？」

「もういいじゃん、行こうぜ」

そうして皆エイト達の周りから去っていく。

周囲の騒ぎを他所に、アイベロスは困ったように微笑んだ。

「いや、それがね。どうやらナリタのデジタルゲートは、デーモンの攻撃を受けた上に、無茶して動かしたから、あの時に時差修正機能が故障してたみたいだね。だから、君は時差補正なしのままリアルに行っちゃったんだ」

「なっ……!?!」

驚倒しそうなほどの事実がさらりとアイベロスからもたらされ、エイトは二の句が告げなくなる。そんな機能はないのに喉がカラカラになったような感覚に陥った。

「他が故障してなくて本当に良かったよ。危ないからナリタのゲートは閉鎖したよ」

「待ってくれよ！ 僕はあつちに一時間ほど滞在した……！ それじゃあ、その間にこっちでは……」

リヴァースにおける体感の一秒は、リアルワールドにおける約三・三四ナノ秒。

では、時差補正がないままリアルイズした者が、一時間リアルに滞在したならば。

デジタルインがその時差を計算して、エイトは半ば絶望にも似た気持ちでその答えを口にする。

「約、34188年……経ったって、こと……?」

「うん、そうだよ。スリープモードにしてたお陰で動かなかったから、石化して、電子苔が生えちゃったよ。これじゃ大昔の忠犬ハチ公の逸話だね。ハチは君<sup>エイト</sup>だけど」

34188年。

それがウラシマ効果によって引き起こされた時間の流れ。

その時差は莫大で、リヴァースやデジモンの殆どが一度どころか何度も転生し、それでもなお足りず、街ごと全て様変わりする程の時間。待っていたアイベロスも時間が経ちすぎて石化し、いつしかランドマークになってしまう程に。

アイベロスはずっとこのシブヤ駅の改札で待ち続けたというのか。

エイトのことを。

「つどうして！ どうして僕を呼び戻さなかったんだ！」

血相を変えたエイトに向かって天使はへらりと笑った。

「だって、こつちから連絡を送っても、もう遅かったから。それに写真を送ってきてくれたらどうか？ 君は無事だって確認できたし、楽しそうなら、いいかなって」

それはエイトにとってはついさっきの出来事だ。

しかしリヴァースにおいては気が遠くなるような過去の出来事なのだ。

アイベロスはデジタルワールドでも指折りの実力を持つ天使となった。

その究極体としての生命力が彼をこの34188年という果てなき時間生かし続けた。

エイトは耐えられなくなってアイベロスを軽く揺さぶった。

彼の心はまるで誰かに手を突っ込んで渦を巻かれたかのように千々に乱れていた。

「だからって！ どうしてこんなになるまで！ 僕とのパートナー接続を解除して、自由になれば良かったのに！」

この感情をどう伝えたらいいのかわからない。

悔しいような、喜びたいような、地団駄を踏みたくなるような。きつと彼に涙を流す機能があつたなら、滂沱と流れ落ちていたに違いない。デジブレインの奥がビリビリする。アイベロスにぶつけるのは間違っているとわかっているにもかかわらず、取り返しがつかないことを彼にしてしまったという現実を本人に拳ごと叩きつけてしまう。

それなのに、アイベロスは無邪気に笑った。

「だって、僕は君の友達だろ？ 僕が待つてなくちゃ君が一人になっちゃうじゃないか」

その時、エイトの中で、かちりとアイベロスに関するラベルの名前が嵌った。

ずっと隣にいた。けれど、親でも家族でもない。

仕事のパートナー、という言葉じゃ物足りない。

相棒、では堅すぎる。

もつと暖かくて、気安くて、すぐ傍にあるもの。

何度生まれ変わっても結ばれるその絆。

その答えは、友達。

(神さんはどこにでもいるんや。……あんたの中にもね)

ばーちゃんの言葉が蘇る。

——僕の神さんは、ここにいた。

その衝動のまま、エイトはアイベロスを強く抱きしめた。

「ごめん、アイベロス……」

「君は帰ってきた。仕事は達成されたよ。謝ることなんて何一つないよ」

顔は見えないけれど、この優しい天使は人懐っこい笑顔を浮かべているに違いない。

エイトはアイベロスの腹に頬を擦り付けた。

「そうだね。……ありがとう」

ざわめく周囲は抱き合うエイト達を興味深そうに眺めながらも、コンマ数秒で飽きて視覚情報から追い出して去っていく。そうして二度とメモリにも残さない。

ここがデジタルワールド・リヴァース。

僕が生きている、薄っぺらくて、最高につまらない場所。

君が生きている、何物にもかえがたい、最高に素敵な場所。

過去も、いままで未来も、これから君は友達。

だから僕はこれからも、ここで生きていく。

エイトはアイベロスから離れてその顔を見上げる。

「ねえ、アイベロス」

「何だい、マスター」

「もし、あの子が大きくなったら……僕、またあの子に会ってみたい」

そう口にした途端、エイトの四肢にえも知れぬ活力が湧いた。

未来への願望。

それは間違いなく「生きている」者の証だった。

——僕も、生きている。

願いは叶わないかもしれない。けれどエイトの口の端は自然と吊り上がっていた。

「行こう。アスモデウスに報告をしなくては」

そして、エイトはアイベロスと手を繋いで歩き出した。

世界の反対側で生きている永人との再会を信じて。

新しい時代の風が吹いていた。

リバース・エイト 完